Shinshu University Journal of Educational Research and Practice, *No.9*, pp. 327-353, 2016
信州大学教育学部研究論集　第9号　pp. 327-353　2016年

＜翻　訳＞

叙事詩の宗教哲学

—Mokṣadharma-parvan 和訳研究 (XXXIX) [1]—

茂 木 秀 淳　元信州大学教育学部

キーワード： ジャナカ王，スラバー，パンチャシカ，弁論術

[308 章][2](B.320 章, C.11852-12043, K.325 章)

ユディシュティラは言った。

(1)　家長であることを放棄せず，認識による制御に，すなわち，解脱の真実に到達したのは誰か[3]，最高のクル族の王仙よ。(それを) 私にお話し下さい。

(2)　この (日常的な) 自己 (アートマン) はどのように捨てられるのか[4]。また捨てる者と

[1]本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharma-parvan 和訳研究 (XXXVIII)—』(信州大学教育学部研究紀論集第 9 号 (本号)) に続くものである。略号などは前稿に準ずる。なお本号で用いる主なものは下記のとおりである。

- Hopkins[1889]: E.W.Hopkins, The Social and Military Position of the Ruling Caste in Ancient India, As Represented By The Sanskrit Epic, JAOS. vol.13, 1889, pp.57-374.
- Hopkins[1899]: E.W.Hopkins, Lexicographical Notes from the Mahābhārata, JAOS vol.20, pp.18-30, 1899.
- Hopkins[Great Epic]: E.W. Hopkins, The Great Epic of India, Its Character and Origin, 1901, Reprint Caluctta 1978.
- Hopkins[1902]: E.W. Hopkins, Remarks on the Form of Numbers, the Method of Using them, and the Numerical Categories found in the Mahābhārata, JAOS vol.23, pp.109-155, 1902.
- Hopkins[1903]: E.W.Hopkins, Epic Chronology, JAOS. vol.24, pp.7-56, 1903.
- Hopkins[1910]: Mythological Aspects of Trees and Mountains in the Great Epic, JAOS.vol.30, 1910, pp.347-374.
- Nyāya Sūtra: Die Nyāyasūtras, Text, Übersetzung, Erläuterung und Glossar, Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes, by Walter Ruben, Leipzig, 1928. (Reprint, Nendeln, Liechtenstein, 1966)
- Johnston[1937]: E.H.Johnston, Early Sāṃkhya, London,1937.
- Buitenen[1957]: J. A. B.van Buitenen, Studies in Sāṃkhya(III), JAOS 77, 1957, pp.88-107.
- Edgerton[1965]: Franklin Edgerton, The Beginnings of Indian Philosophy, London, 1965.
- 中村元 [1977]: 中村　元「生活者の倫理–『マハーバーラタ』における主張」、法華文化研究第 3 号, pp.1-97, 1977.
- Bhattacharya[1985]: R.S.Bhattacharya, An Introduction to the Yogasūtra,Varanasi, 1985.
- 中村 [2000]: 中村了昭「マハーバーラタの哲学 解脱法品原典解明」(下) 平楽寺書店 2000.
- Oberlies[Grammar]: Thomas Oberlies, Grammar of Epic Sanskrit, (Indian Philology and South Asian Studies 5) Berlin 2003.

[2]この章には，Edgerton の抄訳 (Edgerton[1965]: p.331)，また中村元博士による章全体の和訳がある。(中村元 [1977]: pp.67-87)

[3]P.,B.: kaḥ prāpto vinayaṃ buddhyā mokṣṣatattvaṃ　K. kaḥ prāpto bhūpatiḥ siddhiṃ mokṣṣatattvaṃ　Cn. vinīyate, vilīyate 'sminn iti vinayo layasthānaṃ, mokṣatattvam / (vinīyate とは，すなわち，その中に滅する，という意味であるから，vinayaḥとは，帰滅の状態に，すなわち，解脱の真実に，(滅する) という意味である)　Cp. vinayaṃ, viśiṣṭajñānam / buddhyā, mamatātyāgakauśalena / (vinayam とは，すぐれた知識を，という意味である。buddhyā とは，自分のものであることの放棄に通じることによって，という意味である)

[4]P.,B.,K.: saṃnyasyate　Ca. saṃnyasyati /

しての自己 (アートマン) は，どのように存在するのか，また，それは誰なのか[5]。また解脱の最高 (の境地) とは何かについても，私にお話し下さい，祖父よ。

ビーシュマは言った。

(3)　ここでも[6]人々はこの古潭を語る。ジャナカ王とスラバーの対話を[7]，バーラタ族よ。

(4)　かつて出家の果報をもつ[8]，ある王がいた。彼は，ミティラーの王で，ジャナカ・ダルマドヴァジャ (法を旗印とする者) という名で，伝えられている。

(5)　彼は，ヴェーダにおいても，解脱の聖典においても，自らの聖典においても[9]，伝承に通暁した者である[10]。彼は，もろもろの感官を集中して (samādhāya)，この国を統治した。

(6)　この者のそのよき振舞いを聞いて，ヴェーダを知る他の賢者たちはもろもろの世界で羨んだのである，人々の支配者よ。

(7)　そのとき，そのダルマの時代に，ヨーガの法を (yogadharmam) 実践する[11]スラバーという名の乞食女が，一人で大地を遍歴していた。

(8)　この世界すべてを遍歴するその女は，ミティラーの支配者が，解脱に至った者として (mokṣe)，三叉の杖をもつ者たちによって[12]語られるのを，あちこちで聞いた。

(9)　彼女は，この大変微妙な話を聞いて，「本当なのか。(あるいは) そうでないのか」という疑問が生じ，ジャナカ王に会おうという意欲が生じた。

(10)　そこでこの女は，ヨーガ (の超能力) によってこれまでの姿を[13] 捨てて，完全な肢体をもつ者として，別の最上の姿をとった。

---

[5]P. saṃnyastātmā yathā ca yaḥ　B.,K.: vyaktasyātmā yathā yat　Cn. (reading *vyaktasyātmā*): vyaktasya sthūladehasya ātmā svarūpaṃ yathā saṃnyasyate, tyajyate / (vyaktasya，すなわち，粗大な身体の，ātmā 自己は，自分の姿を，yathā どのように，saṃnyasyate，すなわち，捨てられるか，という意味である)

[6]atrāpi　Ca. atra, saṃnyāsapathi / (atra とは，捨離の道に関して，という意味である)

[7]Hopkins は，ジャナカとスラバーの対話は，叙事詩の古い部分にはなかったと指摘し，それを支持するものとして，この章における vipulā の使用頻度が平均より少ないことを挙げている。(Hopkins[Great Epic]: p.224.21-26)

[8]saṃnyāsaphalikaḥ　Ca. saṃnyāsaphalikaḥ, saṃnyāṃsaṃ vinā saṃnyāsaphalavān / (saṃnyāsaphalikaḥとは，出家することなしに，出家の果報をもつ，という意味である)/　Cn. saṃnyāsaphalaṃ samyagdarśanaṃ, tad asyāstīti / (出家の果報とは正見であり，それが彼にある，という意味である)

[9]sve ca śāstre　Cn. sve śāstre, daṇḍanītau / (sve śāstre とは，裁判の学において，という意味である)　Cs. arthaśāstre / caśabdāt dharmaśāstre ca / (政治学において，という意味である。*ca*(そして) という語によって，法典においても，という意味も含意されている)

[10]P. kṛtāgamaḥ　B.,K.: kṛtaśramaḥ

[11]anuṣṭhitā　Cn. anuṣṭhitā, kartari ktaḥ (Pāṇini 3.4.72) / (anuṣṭhitā とは，行為者の意味で接辞 ta が用いられているのである)

[12]tridaṇḍabhiḥ　Ca. tridaṇḍabhiḥ, yativratabhiḥ / (tridaṇḍabhiḥとは，修行者の誓いをもつ者たちによって，という意味である)

[13]pūrvarūpaṃ　Cp. pūrvarūpaṃ, bhikṣukatvānurūpam / (pūrvarūpam とは，乞食者たることにかなった姿を，という意味である)

(11)　美しい眉をもち，蓮のごとき目をもつ女は，まばたきする間に，軽い矢の進行のごとく進んで，ヴィデーハ国の町に行った。(Cf.MBh.XII.284.32; Hopkins[1903]: short indefinite period of time, *cakṣurnimeṣamātreṇa*, p.10.9, *laghvastragatigāminī*, p.11.5)

(12)　女は，多くの人で賑わう[14]美しいミティラーに着いて，乞食行を装って，ミティラーの支配者を見た。

(13)　その時[15]，王は，その若い美しい姿を見て，「この女は誰か，誰の子か，一体どこからきたのか」と驚嘆し (て言っ) た。

(14)　それからこの女を歓迎して，よき椅子を与え (vyādiśya)，足の浄めによって礼拝して，よき食事によって満足させた。

(15)　そこで，乞食女は食事し終って満足し，大臣たちに囲まれた王に[16]，あらゆる注釈書を知る者たちの間に[17]うながした。

(16)　しかしスラバーは，この王がもろもろの義務を遂行しつつも解脱しているのか，そうでないかという[18]疑問をもったので，ヨーガを知る彼女は，(自分の) 心によって (王の) 心に[19]入ったのである，大地の主よ[20]。

(17)　スラバーは，両目の光線たちによって，(王の) 両目の光線たちを制御し，(座るのを?) 促そうとした王を[21]ヨーガの紐たちで縛った[22]。

(18)　ジャナカ王もまた，微笑みつつ[23]，この女の心 (bhāva) に打ち勝って[24]，その最高

[14]P.,K.: samṛddhajanasaṃkulām　B. prabhūtajanasaṃkulām

[15]P. vapus tathā　B. vapus tadā　K. punas tadā

[16]P.,B.: atha bhuktavatī prītā rājānaṃ mantdṛbhir vṛtam　K. atha bhuktavatīṃ prītāṃ rājā tāṃ mantdṛbhir vṛtaḥ

[17]sarvabhāṣyavidāṃ madhye　Cn. sarvabhāṣyavidāṃ, sūtrārthajñānām / (sarvabhāṣyavidām とは，経典の意味を知る者たちの，という意味である)　Cs. sāṃkhyayogatarkaśāstrādividāṃ / (サーンキヤ，ヨーガ，論理の聖典などを知る者たちの，という意味である)

[18]asya dharmeṣu mukto neti　Ca. asya dharmeṣu, nityanaimittikeṣu, kriyamāṇatayā dṛśyamāneṣu satsu, mukto ’yam aphalākāṅkṣī vihitatvāt karma kurute, yad vā kāmuka iti / (asya dharmeṣu とは，すなわち，常時と臨時のもろものの王の義務において，(彼が) 実行者と見なされるもろもろの義務がある時に (?)，muktaḥ，すなわち，彼は果報を求めずに，規定されているから，行為をするのか，あるいは，願望をもって (行為するの) か，という意味である) Cs. dharmeṣu chattracāmarādiṣu rājacihneṣu / (dharmeṣu とは，日傘やヤクの尾などもろもろの王の標識において，という意味である)

[19]sattvaṃ sattvena　N. sattvaṃ buddhiṃ sattvena svayā buddhyā praviveśa / (sattvam，すなわち，意識 (?buddhi 心) に，sattvena，すなわち，自分の意識によって，praviveśa 入った，という意味である)

[20]P. praviveśa mahīpate　B. praviveśa mahīpateḥ　K. praviṣṭā ’bhūt mahīpate

[21]P. sā sma saṃcodayiṣyantaṃ　B.,K.: sā sma taṃ codayiṣyantī　Cn. praṣṭum icchantī / ((codayiṣyantī とは) 尋ねようと望んでいた彼女は，という意味である)　Cp.(reading *saṃnodayiṣyantaṃ*) praṣṭukāmaṃ / ((saṃnodayiṣyantam とは) 尋ねようと望んだ者を，という意味である)

[22]yogabandhair babandha　N. yogabandhaiḥ yogabalena cittabandhair babandha vaśīcakāra / (yogabandhaiḥ，すなわち，ヨーガの力によってもろもろの心の紐を用いて，babandha，すなわち，支配した，という意味である)

[23]utsmayan　Cn. utsmayan, svasyājeyatvābhimāne garvaṃ kuruvan / (utsmayan とは，自分の不敗性の思いの中で，高慢になりつつ，という意味である)　Cp. svakīyam asvātantryaṃ buddhvā, tatkṛtajñānena utsmayan īṣaddhasan / (自分のものが自由にならないことに気がついて，それが為されたという認識から，utsmayan，すなわち，少々笑いつつ，という意味である)

[24]viśeṣayan　Cn. viśeṣayan, abhibhavan / (viśeṣayan とは，勝利して，という意味である)　Cp. tatkauśalād api svayogakauśalasya viśeṣaṃ khyāpayitum / (その (女の) 熟練さよりも，自分のヨーガの熟練さの優越を知らしめるために，という意味である)　Cs. saṃbhāvayan / (近づいて，という意味である)

の王は，心によって女の心を (逆に) 捕まえた[25]。

(19)　かくして，一つの基体において[26]なされたこの対話を聞くがよい。日傘など (の王の標識) から離れた者と，三叉の杖 (という出家者の標識) から離れた者の[27](対話を)。

(ジャナカ王は言った。)[28]

(20)　「尊者のこの遊行は何のために (kva) 為されたのですか[29]。あなたはどこに行くのですか。あなたは誰の子なのですか。あなたはどこから来たのですか」と大地の主はこの女に尋ねた。

(21)　(あなたの) 学問・年齢・種姓について，真実は知られていません。それ故，これらのことについての返答を，(この) よき人との出会いにおいて[30]お聞かせ下さい (pravedyam)。

(22)　私を日傘などのもろもろの (王に) 特徴的なものから完全に解き放たれている者と知りなさい。そのような私はあなたを尊敬したい。私は，あなたは尊敬に値すると考えるからです[31]。

(23)　かつてある人から，その人の他に説く人はいない，このすぐれた知識を私は得ました[32]。その人の解脱に関する説について私の言うことを聞きなさい。(Cf.Hopkins[Great Epic]: *vaiśeṣikaṃ jñānam*, p.154.25)

(24)　私は，パラーシャラ姓の長老にして[33] 偉大なる乞食者パンチャシカの弟子として大変重んじられ，(cf.Hopkins[Great Epic]: Janaka, a disciple of Pañcaśikha, p.154.15; Johnston[1937]: Vṛddha Parāśara, another name for Pañcaśikha, pp.8.22-9.3)

---

[25]pratijagrāha bhāvena bhāvam asyā　Cp. asyā bhāvam abhiprāyaṃ, bhāvena svacittena prajagrāha, manasānumene / (asyā この女の，bhāvam，すなわち，意図を，bhāvena，すなわち，自分の心によって，pratijagāma，すなわち，心で推理した，という意味である)

[26]ekasminn adhiṣṭhāne　Ca. adhiṣṭhāne, śarīre / (adhiṣṭhāne とは，身体において，という意味である)

[27]P.,B.: muktāyāś ca tridaṇḍake　K. muktāyāś ca tridaṇḍakaiḥ　Ca. dvayor api vihitatvamātreṇa svacihnaṃ dhārayator ity arthaḥ / (両者とも規定のみによって，自分の旗印を保持している，という意味である)/　Cn. ubhāv api sthūladehopaskāraṃ tyaktavantāv ity arthaḥ / (両者とも大きな身体の補足物を捨てた，という意味である)

[28]B.,K. は，第 20 詩節の前に janaka uvāca を挿入している。以下第 75 詩節までジャナカ王の言葉が続く。

[29]kva caryeyaṃ kṛtā　Ca. (reading *kva varṣeyaṃ*) varṣā, varṣākālaḥ / kva caryeyam iti pāṭho 'rvācīnaḥ / (varṣā とは，雨期である。kva caryeyam という読みは後に生じた)　Cp. kva varṣeyaṃ, iyaṃ varṣā, cāturmāsyalakṣaṇā, kva kṛtā, kutra deśe kṣapitā / (varṣeyam は，iyaṃ varṣā と分けられる。varṣā 雨期とは，チャートルマースヤ祭を伴う (期間である)。kva kṛtā とは，どこの土地で断食したのか，という意味である)

[30]P. satsamāgame　B.,K.: matsamāgame　Ca. (matsamāgame) tasmād āgame āptopadeśe saty evāntaraṃ vedyam / (tasmāt それ故，āgame，すなわち，信頼すべき人々の正しい教えにおいて，相違 (?) が知られるべし，という意味である)

[31]P. mānārhāsi matā hi me　B.,K.: mānārhā hi matā 'si me

[32]jñānaṃ vaiśeṣikaṃ purā　Ca. vaiśeṣikaṃ, padārthasvarūpanirūpaṇadvārā heyopādeyaphalaṃ, heyopādānābbhyām ātmatattvavivekaphalaṃ kāṇādapraṇītaṃ śāstram / yadvā viśeṣāya pravṛttaṃ sāṃkhyapadena prasiddham eva śāstraṃ vaiśeṣikam / (vaiśeṣikam とは，句義の本質を定めることを通しての，取捨の結果である。すなわち，取捨の両者によって，アートマンという真理の識別を結果とする，カーナーダによって説かれた教義である。あるいは，vaiśeṣikam とは，識別のために活動するサーンキヤの立場によって確立された教義である)　Cp. ātmano yo viśeṣas tatprakāśakam / (アートマンの特異性を照らすもの，という意味である)　Cs. sarvasmād vilakṣaṇaṃ, mokṣayogyam / (あらゆるものと特徴を共にしない，解脱に有効な，という意味である)

[33]P. pārāśaryasagotrasya vṛddhasya　B.,K.: parāśarasagotrasya vṛddhasya

(25)　サーンキヤの知識，ヨーガ，そして国王の法という三種の解脱の教えにおいて[34]道を究め，疑いを断ちました。

(26)　彼 (パンチャシカ) は，聖典に示されたとおりの[35]道を通って，かつてここを遊行した時，雨期の四カ月を私のところで快適に過ごしました。

(27)　私は，サーンキヤの指導者であり，その意味をよく観察した彼パンチャシカによって，正しく三種の解脱を[36]伝えられ，そして王位から去らしめられることはありませんでした。

(28)　そのような私は，解脱にふさわしいその三種の完全な振舞いを[37]，貪欲を離れ，最高の境地に[38]住して，独りで行うでしょう。

(29)　離欲がこの解脱にとって最高の方法であります[39]。知識のみより[40]離欲が生じ，それ (離欲) によって，人は解脱するのです。(Cf.Śankara Bhāṣya on Bṛhadāraṇyaka Upa. 4.5.15)

(30)　人は知識によって努力し[41]，努力によって「大きなもの」に[42]達します。「大きなもの」は対立を解き放つためのもので[43]あります。それ (対立の解放) が成就 (siddhi) で

[34]trividhe mokṣadharme　Ca. trividhe, karmamātrasādhye, jñāmātrasādhye, samuccayasādhye ca vakṣyamāṇe / (trividhe とは，行為のみによって達成される，知識のみによって達成される，(両者の) 総合によって達成される，とこれから述べられるであろう)　Cn. sāṃkhyayogavidhiśabdaiḥ krameṇa jñānopāstikarmakāṇḍārthā jñeyāḥ / ayam eva trividho mokṣamārgaḥ / (サーンキヤ・ヨーガ・法という語によって，順番に，知識・礼拝・ヴェーダ祭式の実践を意味していると知られるべきである。これこそが三種の解脱の道である)　Cs. trividhe mokṣadharme, kevalajñāne kevalasamucitajñāne brahmārpaṇatayānuṣṭīyamāne kevalakarmaṇi cety arthaḥ / (trividhe mokṣadharme とは，知識のみにおける，単独と総合の知識における，ブラフマンを上位者として遂行されるべき行為のみにおける，という意味である)　三種の解脱については，Sāṃkhya-Saṅgaraha (Chowkhamba Sanskrit Series, Nos. 246, 286, 1969) 所収の，Sāṃkhyatattvavivecana (p.17.13), Samāsasūtrasarvopakāriṇī Ṭīkā (p.64.21), Sāṃkhyasūtravivaraṇa (p.72.8), Tattvasamāsavṛtti (pp.74.16, 87.20) に言及がある。

[35]yathāśāstradṛṣṭena　Cs. yathāśāstradṛṣṭena, grāmaikarātraṃ nagare pañcarātram iti śāstroktamārgeṇa / (yathāśāstradṛṣṭena とは，村では一夜，町では五夜，というように聖典に述べられた道によって，という意味である)

[36]trividhaṃ mokṣaṃ　Cs. mokṣaṃ, mucyate 'neneti mokṣasādhanam ity arthaḥ / (mokṣam とは，それによって開放される，というように解脱の達成手段を，という意味である)

[37]vṛttiṃ trividhāṃ mokṣasaṃhitām　Cs. atra padavivaraṇarūpādhyātmagrantho vṛttiḥ / tāṃ trividhāṃ sāṃkhya-yogarūpāṃ mokṣasaṃhitāṃ, mokṣasaṃbandhinīṃ carāmi, arthato 'vagacchāmi / (ここでは vṛtti とは，語の解説の姿をとった内我についての著作である。その三種の，サーンキヤとヨーガの姿をとった，mokṣasaṃhitām，すなわち，解脱に結びつける (vṛtti) を，carāmi，すなわち，正しく理解するであろう，という意味である)

[38]pade paramake　Ca. paramake mokaṣapade, vairāgye / (paramake とは，解脱の境地において，すなわち，離欲において，という意味である)

[39]paramo vidhiḥ　Cs. paramo vidhiḥ, utkṛṣṭaṃ sādhanam / (paramo vidhiḥとは，すぐれた達成手段である)

[40]jñānād eva　Cs. jñānāt, nityānityavastuvivekāt / (jñānāt とは，恒常と非恒常のものの区別より，という意味である)

[41]kurute yatnaṃ　Ca. kurute yatnaṃ, śravaṇādīny anutiṣṭhati / (kurute yatnam とは，聴聞などに従事する，という意味である)

[42]mahat　Cn. mahat, ātmajñānam / (mahat とは，アートマンの知識に，という意味である)　Cs. ahaṃ brahmāsmīti jñānam / (私はブラフマンである，という知識に，という意味である)　Cv. brahma / (ブラフマンに，という意味である)

[43]dvandvapramokṣāya　Cs. dvandvapramokṣāya, sukhaduḥkhādirūpasaṃsārahananāya / (dvandvapramokṣāya とは，楽と苦などの姿をした輪廻を滅するために，という意味である)

あり，それは年齢を超越するものです[44]。

(31)　この世において，迷盲を去り，放浪し，執着を離れることによって，私は，このすぐれた認識に到達したのです[45]。その認識とは対立なきこと (nirdvandvatā) であります。

(32)　軟らかくなった[46]，そして水のあふれた田地が芽を生じさせるのと同様に，人々の行為は[47]再生 (punarbhava) を引き起こすのであります。

(33　そしてまた，鉢の中で，あるいはどこであっても，焼かれた種子は，芽の原因が揃ったとしても (prāpyāpy aṅkurahetutvam)，種子の性質をもたないので，(芽は) 生じないのです。

(34)　これと同様に，シカーと呼ばれる[48]至尊の乞食(こつじき)者によって私の知識は，種子なきものとされたので，もろもろの対象に対して働くことはないのです (na jāyate)。

(35)　私は，如何なるものにも，すなわち，無所有にも，所有にも[49]執着することはありません。貪欲と嫌悪は[50]無意味なものですから，これらに[51]執着することはないのです (nābhirajyati)。

(36)　私の右手に栴檀香をふりかける者と，私の左手を手斧で[52]切るような者がいたとしても，この両者は私にとっては等しいのであります。(Cf.MBh.XII.9.25; Ahirbudhniya Saṃhitā (I) 15.65c-66b)

---

[44]yā vayotigā　Ca. vayotigā, cirakālopāsanayā prāptā, susthitety arthaḥ / (vayotigā とは，長時間座ることによって達成される，すなわち，安定した，という意味である)　Cn. mṛtyujayāya bhavati / ((vayotigā とは) 死に勝つために存在する，という意味である)　Cs. kālāpariccheḍyā, anantā / ((vayotigā とは) 時間に限定されない，すなわち，無限の，という意味である)

[45]P. buddhiḥ prāptā　B. buddheḥ prāptā　K. siddhiḥ prāptā

[46]P.,B.: mṛdūbhūtam　K. mṛdhubhūtam　Cs. mṛdūbhūtam, parikarmitam (mṛdūbhūtam とは，準備された，という意味である) /

[47]karma　Cs. karma, phalābhisaṃdhinā kṛtam / (karma とは，結果を意図して行われたものは，という意味である)

[48]śikhāproktena　Ca. śikhāproktena, śikhāpadopdarśitanāmnā, pañcaśikhena / (śikhāproktena とは，髻という語によって示された名前をもつ者，すなわちパンチャシカによって，という意味である)　Cn. śikhāpadayuktaṃ proktaṃ, nāma, yasya tena / (髻という語と結びついた proktam，すなわち，名前が，ある者についている，その者によって，という意味である)

[49]nānarthe na parigrahe　Ganguli: I never experience love for my spouse or hate for my foes (p.59.15)　Deussen: irgend etwas, nicht bei Feindlichem, nicht bei Angehörigem (p.676, v.35)　中村元 [1977]:「無意義なものに対してであろうとも，所有に対してであろうとも」(p.69, v.35)

[50]P. rāgadoṣayoḥ　B.,K.: rāgaroṣayoḥ　中村元 [1977] は，写本 D_{s2} の rāgadveṣayoḥを採用している (p.83, note.16)。

[51]eteṣu　Cs. eteṣu, vaidehadeśeṣu / (eteṣu とは，ヴィデーハ国のもろもろの場所に，という意味である)　この詩節には複数形の名詞はないので，ab 句の名詞をまとめて全体として指すか，あるいは前詩節の viṣayeṣu (「もろもろの対象」) を指しているかであろう。

[52]P. vāsyā ca　B.,K.: vāsyāpi　Cn. alpaṃ vāsyaṃ vāsī / (vāsīとは，小さな斧である)　Cv. vāśī nāma kāruṇāṃ kāṣṭasamīkaraṇayantraviśeṣaḥ / bācīty apabhraṃśabhāṣā / (vāśīとは，職人たちにとっての木材を等しくする器具である。bācīは，アパブランシャ語である)

(37)　このように，目的を達成した私は，安楽をもち (sukhin)，土くれ・石・金を等しく見ます。執着を離れた私は，王位にいようとも，他の者たち，三叉の杖をもつ者たちよりも[53]すぐれているのです[54]。

(38)　かつての偉大な聖仙たちによって[55]，解脱において三種の完成 (niṣṭhā) が経験的に知られました。それは，世間を超える知識ともろもろの行為の完全な棄却であります。(Cf.Hopkins[Great Epic]: *trividhā niṣṭā dṛṣṭā*, p.154.21)

(39)　解脱の教義を知る人々は，知識の完成 (jñānaniṣṭhā) を語ります。一方，微細なものを見る苦行者たちは[56]，行為の完成 (karmaniṣṭhā) を語るのであります。

(40)　このように知識と行為の両者とも完全に (kevalam) 捨てて，第三の完成 (niṣṭhā) が，かの偉大な人 (パンチャシカ) によって述べられました。(Cf.Hopkins[Great Epic]: the third view of Pañcaśikha, p.154.25)

(41)　禁戒と勧戒があれば[57](家長は出家者に等しく?)，また嫌悪，愛欲，所有，そして，高慢，偽りがあれば，彼ら (出家者) は家長たちに等しいのであります[58]。

(42)　三叉の杖などをもつ者たちにおいて，何らかの知識による解脱があるならば，どうして日傘などをもつ者たちにおいて，ないことがありましょうか[59]。両者に等しい原因として (三叉の杖と日傘などの) 所有があるのですから。

(43)　この世では，もの (artha) は，それぞれの動機に応じて (kāraṇena) 人のもの (kasyacit) となります。人は皆，各々自分の所有において，それぞれのもの (dravya) を取るのです[60]。

---

[53]anyais tridaṇḍabhiḥ　Ca. anyair iti pañcamy arthe tṛtīyā / (anyais は，奪格の意味での具格である)

[54]viśiṣṭo　Cv. viśeṣeṇa śikṣitaḥ viśiṣṭaḥ / (viśiṣṭaḥとは，特別に教えを受けた者である，という意味である)

[55]P. pūrvair maharṣibhiḥ　B.,K.: 'nyair mokṣavittamaiḥ

[56]yatayaḥ sūkṣmadarśinaḥ　Ca. sūkṣmadarśinaḥ, karmaṇas tyāge jñānasya ca bhraṃśaśaṅkāyāṃ bahutarāpāyadarśinaḥ / (sūkṣmadarśinaḥとは，行為の棄却に，知識の消滅を恐れて，より多くの損失を見る者たちは，という意味である)　Cs.(reading *saṃśitavratāḥ*) samyak śitaṃ tīkṣṇīkṛtaṃ vrataṃ yais te saṃśitavratāḥ / te buddhiśuddhyarthaṃ karmaniṣṭhāṃ vadanti / ((sam) すなわち，正しく，śitam，すなわち，先鋭にされた，vratam 誓約を，もつ人々，彼らが saṃśitavratāḥである。彼らは，認識 (? buddhi 心) を清めるために，行為の完成を語るのである)

[57]yame ca niyame caiva　Cs. brahmacaryasatyāsteyāparigraharūpo yamaḥ / svādhyāyadevatārcanādir niyamaḥ / (yamaḥとは，禁欲・真実・非偸盗・不所有という形をとり，niyamaḥとは，ヴェーダ学習・神の崇拝などである)

[58]saṛśās te kutumbibhiḥ　N. yamādau sati gṛhasthaḥ sanyāsi tulayaḥ, kāmādau sati sanyāsy api gṛhasthatulya ity arthaḥ / (禁戒などがあるならば，家長と出家者とは等しい。欲望などがあるならば，出家者であっても家長に等しい，という意味である)

[59]chattrādiṣu kathṃ na syāt tulyahetau parigrahe　Cn. tridaṇḍaparigrahavac chattrapaigraho 'pi na bādhakaḥ / (三叉の杖の所有のごとく，日傘の所有もまた，(解脱を) 妨げるものではない)

[60]この詩節は artha の意味が多様なため，意味がとりにくい。全体として，目的に沿ったものを何か所有するという点では，出家も在家も同じである，という趣旨と解した。また P. は，B.,K. とは大きく異なっている。C. もほぼ B.,K. と同じ読みをしている。

P. yena yena hi yasyārthaḥ kāraṇeneha kasyacit /
tat tad ālambate dravyaṃ sarvaḥ sve sve parigrahe //

B.,K.: yena yena hi yasyārthaḥ kāraṇeneha karmaṇi /
tat tad ālambate sarvadravye (C. sarvaṃ dravyaṃ) svārthaparigrahe //

B. の訳として Ganguli は，次のように訳している: One becomes attached to all those things and acts with which one has need for the sake of one's own self for particular reasons.　(p.59.42)

(44)　家長期に罪を見出し，他の生活期に向かう者は，捨てたり取ったりしているのですから[61]，その者もまたもろもろの執着から解放されているのではありません。

(45)　処罰と恩顧を本質とする[62]支配者であることで等しい時，王仙と乞食者の師匠たちは[63]，いかなる原因 (hetu) によって解脱するのでしょうか[64]。

(46)　実に，支配者であるとしても[65]，ただこの世では知識によってのみ解脱するのです。最高の地位にいる者たちが，どうして解脱しないことがありましょうか[66]。

(47)　袈裟を着ること，剃髪，三叉の杖，水瓶という，これらもろもろの標識はとりたてて (atyartham)[67]解脱のためではない，というのが私の考えであります。

(48)　もしこの標識があったとしても，知識のみがここでの原因ですから，この世での苦 (から) の解脱のためには，標識のみでは無意味です。

(49)　あるいはまた，苦の軽減を[68]考慮して，標識に (意味があると) 考える (kṛtā matiḥ) ならば，どうして日傘など (の王の標識) において，まさに同様の意味 (arthāsāmānyam) が認められないのでしょうか。

(50)　不所有 (ākiṃcanya) の中に解脱はない。所有の中に束縛はない。所有においても他方 (=不所有) においても，人は知識によって解脱するのであります。

(51)　それゆえ，法と利益と愛欲の中で，そして王位の獲得の中で，これら束縛の家々の中で (bandhanāyataneṣu)，束縛なき境地に[69]住する者 (がいること) を知りなさい。

---

[61] utsṛjan parigṛhṇaṃś ca　Cv. bhāryāgehādikam utsṛjan kamaṇḍalukāṣāyādikaṃ parigṛhṇan / (妻や家などからなるものを，utsṛjan 捨てつつ，水瓶と袈裟などからなるものを，parigṛhṇan 取りつつ，という意味である)

[62] P. nigrahānugrātmani　B.,K.: nigrahānugrahātmake　Cs. yathā rājñaḥ svaviṣayavāsinaṃ prati nigrahānugrahārthau tathā bhikṣāyām api svāntevāsinaṃ prati nigrahānugrahau / (王は，自国の住民に対して，nigrahānugraha という仕事がある。それと同様に，乞食者においても，心に住む者に対して，nigrahānugraha がある，という意味である

[63] P. rājarṣibhikṣukācāryā　B.,K.: rājabhir bhikṣkās tulyā　Ca. rājarṣibhikṣukācāryāḥ, rājā bhūpatiḥ ṛṣir vanasthaḥ, bhikṣur yatiḥ, ācāryasyāyam iti vyutpattyā ācāryo brahmacārīti catvāro 'py āśramāḥ /(rājā は王，ṛṣi は林住者，bhikṣu は苦行者，「ācārya にはこの者がいる」という語源解釈によって，ācārya は学生である，というように，四種の生活期の者たちは，という意味である)

[64] この詩節の趣旨は，王と出家者はある性質を共有しているのであるから，出家者のみが解脱し，王はしない，ということはない。両者に解脱が可能であり，その原因は何か，ということであろう。

[65] atha saty ādhipatye 'pi　Ca. ādhipatye, kvacana samitkuśaphalamūlatridaṇḍikāṣāyādau prabhutve yatheṣṭaviniyogaphale /　(ādhipatye とは，どこか，薪・クシャ草・果実・根・三杖・袈裟などが支配者性であるところでは，すなわち，望みどおりの遠離を結果とするところでは，という意味である)

[66] P.,K.: mucyante kiṃ na mucyante pade paramake sthitāḥ　B. mucyante sarvapāpebhyo dehe paramake sthitāḥ

[67] P. liṅgāny atyartham etāni　B.,K.: liṅgāny utpathabhūtāni　中村元 [1977] は，B. などの *utpathabhūtāni* という読みを考慮し，*atyartham* を *liṅga* にかけて，「これらは度を超えた (異常な) 標幟」と解し，苦行者に否定的な見解の存在を強調している。(p.70 下段, 訳注 No.21)

[68] duḥkhaśaithilyaṃ　Ca. duḥkhaśaithilyāt, putrādivat kamaṇḍaluprabhṛtibhraṃśe 'pi na duḥkham / (duḥkhaśaithilyāt とは，息子などと同様，水瓶などこわれても苦ではない，という意味である)

[69] abandhe pade　Ca. abandhe, bandhaśūnye mokṣe / (abandhe とは，束縛を欠いている，すなわち，解脱の中に，という意味である)

(52)　王位と支配権からなり，愛着という家に結びつける縄は，解脱の石によって砥ぎすまされた棄却の剣をもつ私によって，ここで断ち切られたのです。(Cf.Hopkins[Great Epic]: doctorine of Pañcaśikha, a king, as good as a beggar, p.154.30)

(53)　このようになり解脱した私に，(出家者である) あなたに対する配慮が生じました[70]，乞食(こつじき)の女よ。あなたの姿 (varṇa) は目的にふさわしくない[71]，ということを話します。このことについて私の言うことを聞きなさい。

(54)　優美さ (saukumāryam)，美貌，すぐれた容姿，若さ，これらはすべてあなたに備わっています。しかし，そして自制 (niyama) は，というと疑問です。

(55)　あなたは，次のような，この (出家者の) 標識にとってふさわしくないことを行いました。それは「この者は解脱しているか，あるいはしていないか」というこのために[72]，私の所有物 (parigraha 身体) を侵したのです[73]。

(56)　願望 (kāma) と結びついた者が解脱したとしても，(その者に) 三叉の杖からなる標識が存在することは[74]ありません。あなたによってこの標識は守られていません[75]。解脱したというのにそれを守っていないのです[76]。

(57)　(あなたは) 私の身体 (matpakṣa) に依存しているのですから，聞ききなさい。これがあなたの罪 (vyatikrama) です。本性として[77]，私がかつて得た所有物に依存しているあなたの[78]。

---

[70]jātāsthas tvayi bhikṣuki　Cs. jātāsthaḥ, tvatsaṅāt punaḥ saṃsāraṃ praveśitavān asmi / (jātāsthaḥとは，私はあなたへの執着のため再び輪廻に入った，という意味である)

[71]P. ayathārtho hi te varṇo　B.,K.: ayathārthaṃ hi te varṇaṃ

[72]P. na vety asmād　B.,K.: na vety syād

[73]asmād dharṣito matparigrahaḥ　Ca. matparigrahaḥ, mayā svīkṛto mokṣaikarasatālakṣaṇo 'rthaḥ / dharṣitaḥ, apasārayitum iṣṭaḥ / (matparigrahaḥとは，私によって獲得された，解脱による安楽のみという特徴をもつものが，という意味である。dharṣitaḥとは，除くことが望まれた，という意味である)

[74]P. kāmasamāyukte mukte 'py asti tridaṇḍakam　B.,K.: kāmasāyukte yukte 'py asti tridaṇḍake　Ca. nāsti tridaṇḍakam, manodaṇḍḍavirahāt / (nāsti tridaṇḍakam は，心の杖を捨てたからである)　Cs. bhāve kāmasamāyukte sati te tridaṇḍakaṃ vyarthaṃ nāsti / (心が願望と結びついていても，あなたの三叉の杖 (の標識) は無意味ではない，という意味である)

[75]na rakṣyate tvayā cedaṃ　Cs. liṅgasyānurūpam anekaṃ rājamandirāgamanatyāgādikaṃ tvayā na rakṣyate / (標識にふさわしい，王宮訪問 (?)・棄却など多くのことは，あなたによって守られていない，という意味である)

[76]P.,B.,K.: na muktasyāsti gopanā　C. vimuktasyāsti gopanā /　あるいは，「(あなたは) 解脱していても (標識を守らないのだから) あなたが保護されることはない」という意味か。　Cn. gopanā, vyabhicārādyakṛtyād ātmarakṣā / (gopanā とは，逸脱などを為さないことによって，自分を守ることは，という意味である)　Cn. のこの注は，*vimuktasyeti pāṭhe* に続く部分にある。B. の読みに従う部分では，次のように注釈している。

anena liṅgenāpi muktasya ārūḍhapatitasya gopanā nāsti / (この標識によっても，muktasya，すなわち，高みから落ちた者にとって，gopanā 保護は，存在しない)

Ganguli は，このように *mukta* を別の意味で理解し，さらに *na muktasya* の代わりに，C. の読み，*vimuktasya* を採用して (p.61, fn.1)，次のように訳している。Duessen も同様である。(p.678, v.57)

As regards those that are freed, it behoves even them to protect themselves from fall. (p.61.11-12)

[77]svabhāvena　Cn. svabhāvena, svena cittena / (svabhāvena とは，自分の心によって，という意味である)　Cs. sahajarāgeṇa / (生来の執着によって，という意味である)

[78]te　Ca. madīyadeśapurādyāśritāyās te / ((te とは) 私の土地や町などに依存しているあなたの，という意味である)

(58)　あなたははなぜ私の国に，そして町に入ってきたのですか。あるいはまた，誰の指示によって[79]，あなたは私の心臓に入ったのですか。

(59)　あなたは，最上の種姓と家系をもつバラモンの婦人です。私はクシャトリヤです。私たち二人が一つに結びつく (ekayoga) ことはありません。種姓の混合をしてはいけません。(Cf.Manu Smṛti 3.4)

(60)　あなたはもろもろの解脱の法の中で生活し，私は家長の生活期にいます[80]。これもまた, あなたの悪しき第二の (罪である) 生活期の混合となるでしょう[81]。(Sandhi irregular: *dvitīyo ”śramasaṃkaraḥ*, Cf.Oberlies[Grammar]: 1.2. Special Cases of *sandhi*, 1.2.4 *-o ’- < / -as ā-/*, p.26.4)

(61)　私は，あなたを，同姓 (sagotra) なのか，あるいは同姓でないのか，知りません (na veda)。あなたは (この点に関して) 私を知りません。あなたが同姓の男に入り込んで来たならば，第三の (罪である) 姓の混合となるでしょう。(Cf.Manu Smṛti 3.5)

(62)　あるいは，あなたの夫が生きているか，あるいはどこかに旅に出ているならば,「他人の妻には近づいてはならない」という (規定によって) 第四の (罪である) 法の混合 (dharmasaṃkara) が生じるでしょう。

(63)　このようにあなたは，無知と結びついて，あるいは誤った認識と結びついて，為すべきことを望んで (kāryāpekṣā)，これらの為すべからざる事どもを (為すのを) 決断したのです。

(64)　あるいはまた，あなたが，何らかの自分の誤りによって独立しているのであれば[82]，ヴェーダをいくら学んだとしても，そのすべては，意味なく為されたことになるでしょう。(Cf.Manu Smṛti 5.147, 9.3; Hopkins[1889]: the begging nun, thought of as being independent by her own fault, p.351.9)

(65)　またあなたには，心の接触を損なう[83]別のこの第三 (の罪) があります。悪しき女の特徴として述べられるべきものが (あなたに) 現われています (?)[84]。

---

[79]P. kasya vā saṃnisargāt　B.,K.: kasya vā sannikarṣāt　Cs.(reading *kasya caiva nisargāt*) nisargāt, mātṛpitṛniyogāt / (nisargāt とは，両親の指示によって，という意味である)

[80]P. vartase mokṣadharmeṣu gārhasthye tv aham āśrame　B.,K.: vartase mokṣadharmeṇa　tvaṃ gārhasthye ’ham āśrame　B.,K. の b 句の tvaṃは，a 句の vartase の主語であるので，B.,K. は，a 句と b 句の第一音節までひとまとまりの意味を作っていることになる。

[81]P.,B.: dvitīyo “śramasaṃkaraḥ　K. dvitīyāśramasaṃkaraḥ　Cn. āśramasaṃkaraḥ, saṃnyāsād gārhasthyaṃ prati punarāgamanam / (āśramasaṃkaraḥとは，遊行期から家長期へと再び帰ることである)

[82]P.,K.: svadoṣeṇeha kenacit　B. svadoṣeṇeha karhicit　Ca. svadoṣeṇa, kāmād anyena jigīṣādinā / (svadoṣeṇa とは，愛欲とは別の，征服欲などによって，という意味である)

[83]bhāvasparśavighātakam　Cn. bhāvayoś cittayoḥ sparśaḥ aikyaṃ, prītir iti yāvat / (bhāvayoḥ，すなわち，両者の心の，sparśaḥ，すなわち，一体性，それは歓喜である，という意味である)

[84]P. pravaktavyaṃ prakāśitam　B.,K.: viṛṇvatyā prakāśitam

(66)　勝利を望むあなたが勝とうと意図しているのは私だけではありません。ここにいる私の取り巻きすべて，彼らにも勝とうとしているのです。

(67)　このようにしてまだ[85]あなたはあなたの視線を (我々に対して) 放っています。私の側 (matpakṣa) を破壊し，自分の側を高めるために。

(68)　このようにあなたは，自分の怒りによって生じた神通力への迷妄によって迷わされて[86]，さらにヨーガの矢を[87]放つのです。毒と甘露を[88]同時 (に放つか) のように。

(69)　なぜならば，(互いを) 望んでいる二人の男女にとって，(互いの) 獲得は甘露のごとくであり，獲得できないことは，たとえ愛のない者にとってさえ，毒のごとき失敗です[89]

(70)　(私に) 触れてはなりません[90]。正しいことを知りなさい。自らの教義に (svaśāstram) 従いなさい。あなたは，私に対して「この者は解脱したのか，していないのか」ということを知ろうとしました。このことはすべて隠されていますが，あなたは私に隠すべきではありません。

(71)　もしあなたが自分の為すべきことのために，あるいは他方の王の (為すべきことのために)，真実を衣服によって隠しているならば[91]，私に隠すべきではありません。

(72)　人は，偽って王に近づくべきではありません。再生族にも決して (近づくべきではありません)。女の徳をそなえた女にも (近づくべきではありません)。なぜならば，これら偽って近づかれた者たちは，(近づいた者を) 殺害するでありましょうから。

(73)　支配権が王たちの力であり，ブラフマンを知る人々にとってはブラフマンが力であります。女たちの最高の力は，容姿，若さ，幸福 (saubhāgya) であります。

(74)　従って，これらの力によって，彼らは[92]力ある者たちとなるのです。自らの目的 (の達成) を望む者は，正直さをもって (彼らに) 近づくべきです[93]。なぜなら不正直は破滅のためのものですから。

---

[85] P. tathā hy evaṃ punaś ca　B.,K.: tathārthatas tataś ca

[86] ṛddhimohena mohitā　Ca. ṛddhimohena, vidyāmadena / (ṛddhimohena とは，呪術という酒によって，という意味である)

[87] P. yogāstraṃ　B.,K.: yogāṃs tvaṃ

[88] viṣāmṛtam　Ca. viṣāmṛtaṃ, viṣasaṃpṛktam amṛtam / (viṣāmṛtam とは，毒を混ぜた甘露を，という意味である)

[89] P. alābhaś cāpy araktasya so 'tra doṣo viṣopamaḥ　B.,K.: alābhaś cāpi raktasya so 'pi doṣo viṣopamaḥ　B.,K. は raktasya と読んで，「愛着ある者にとって，獲得できないことは，毒のごときである」と解している。この読みのほうがわかりやすい。C. もこのように読んでいる。

[90] P. mā sprakṣīḥ　B.,K.: mā tyākṣīḥ　(C. māṃ prākṣīḥ)

[91] P.,B.: satrapratichannā　K. atra praticchannā　Ca. satrapraticchannā, chadmanā gūḍhā / (satrapraticchannā とは，衣服によって隠している，という意味である)　Cn. veṣāntareṇa guptā / (別の外見によって隠している，という意味である)　Cf.MBh.XII.308.185; Hopkins[1899]: *sattra* as *dambha* or *vastra*, p.30.23.

[92] P. ete balinaḥ　B.,K.: eva balinaḥ

[93]「自らの目的 (の達成) を望む者は」は，b 句後半の svārtham icchatā，「正直さによって (彼らに) 近づくべし」は，c 句の ārjavenābhigantavyā」である。icchatā は具格単数，abhigantavyā(ḥ) は主格複数で，格が一致しない。svārtham icchatā の異読に，svārthacintakāḥ(K7,D4,9) があり，この読みならば主格複数となり，c 句の格と一致する。

(75)　ですからあなたは，自分の種姓，学識，行動，考え方 (bhāva)，性格 (prakṛti)，そして，ここに来たことの目的をありのままにお話し下さい。

(ビーシュマは言った。)[94]

(76)　とこのように，不快な，不適切な，礼を欠いたもろもろの言葉をもって，王は語ったが，スラバーは動揺しなかった。

(77)　王が (このような) 言葉を述べた時，みめ美しいスラバーは，それよりも美しい言葉を話し始めた。

(スラバーは言った)[95]

(78)　言葉と心 (buddhi) を損なう十八の[96]欠点を離れ，適切な意味をもち，十八の長所を備えた，(cf.Hopkins[Great Epic]: in relation to *yuktiśāstra* in MBh.XIII.107.40a, p.17, fn.1; no explanation of the eighteen merits, p.95, fn.1)

(79)　不確定性 (saukṣmyam)[97]，考量 (saṃkhyā) と順序の[98]二つ，結論 (nirṇaya)，動機 (saprayojana)[99]，というこれら五種のことがら (arthajāta) が弁論 (vākya) である，と言われています，王よ。(Cf.Hopkins[Great Epic]: Nyāya, the argumentative group of five, p.95.3)

(80)　語と文章とから，もろもろの語の意味を通して[100]流布している[101]，これら不確定性などの事柄の注意深い定義を[102]一つ一つお聞き下さい。

(81)　知識対象が様々であるとき，知識 (jñāna) は，相違に応じて (確定的にではなく) 存在する。そこでの，多数の認識[103]，それが「不確定性」と言われます。(Cf.Hopkins[Great Epic]: Nyāya, p.95.6)

---

[94] B.,K. は，第 76 詩節の前に bhīṣma uvāca を挿入している。

[95] B.,K. は，第 78 詩節の前に sulabhā uvāca を挿入している。

[96] navabhir navabhiś caiva　Ca. navabhir navabhir iti navadvayena militvā aṣṭādaśa vāgbuddhyor doṣāḥ / (navabhir navabhir というように，二つの九によって合計して，十八の言葉と心の欠点である。)　Ganguli は，九つの言葉の欠点 (verbal faults)，九つの心の欠点 (faults of judgement) というように分けて捉えている。(p.62.40)

[97] saukṣmyam　Ganguli: ambiguity (p.62.42)　Hopkins[Great Epic]: subtilty (p.95.6)　Deussen: Sublität (p.680. v.79)　Edgerton[1965]: Subtlety (p.331, v.79)　中村元 [1977]: 微細なこと (p.73, v.79)　中村 [2000]: 微妙性 (p.809, v.79)　*saukṣmyam* は第 81 詩節で定義される。

[98] P. saṃkhyākramau　B.,K.: sāṃkhyakramau　*saṃkhyā* は第 82 詩節で，*krama* は第 83 詩節でそれぞれ定義される。

[99] *nirṇaya*, *saprayojana* は第 84 詩節，第 85 詩節においてそれぞれ定義される。

[100] P. padārthaiḥ padavākyataḥ　B.,K.: padārthapadavākyataḥ

[101] saṃsāryamāṇānām　Cs.　padavākyābhyāṃ padārthe saṃsāryamāṇānāṃ, padarthapratipādanārthaṃ prathamānānām / (語と文章によって語の意味として，saṃsāryamāṇānām，すなわち，語の意味を理解させるために広まっている，という意味である)

[102] P. sulakṣaṇam　B.,K.: svalakṣaṇam　中村元 [1977] は，svalakṣaṇam を採用している。(p.84, 注 34)

[103] P.,K.: tatrātiśayinī buddhis　B. yatrādhivāsinī buddhis　Cn. (reading *adhivāsinī*) nirṇayam aprāpnuvantī, anekakoṭisparśinī buddhiḥ / (決定に達しておらず，複数の点に触れる buddhi があるが，という意味である)　P.,K. の *tatra* は，認識を指すか。

(82)　ある対象に関して，もろもろの欠点ともろもろの長所とを別々に量ること (pramāṇa)，それが「考量」[104]であると理解されるべきです。(Cf.Hopkins[Great Epic]: Nyāya, p.95.9)

(83)　何であれ言いたいことについて，これは先に，これは後に述べられるべきであるという「順序」の適用 (kramayoga)，これも弁論 (vākya) である，と弁論を知る人々は言っています。(Cf.Hopkins[Great Epic]: Nyāya, p.95.11)

(84)　法・利益・愛欲・解脱に関して，個々に (viśeṣatas) 主張を述べた後 (pratijñāya)，「それはこれである」と弁論の最後において宣言されるもの，それが「結論」(vinirṇaya) であります。(Cf.Hopkins[Great Epic]: Nyāya, p.95.14; *nirṇaya*, similarity with Nyāya Sūtra 1.40 (=Ia41), p.95.26)

(85)　願望と嫌悪を源とするもろもろの苦が増大するところ[105]での行為 (vṛtti) が，「動機」であると考えられます，王よ。(Cf.Hopkins[Great Epic]: Nyāya, p.95.17; *prayojana*, similarity with Nyāya Sūtra 1.24(=Ia24), p.95.22)

(86)　これら正しく述べられた不確定性などが一つの (伝達すべき) 事柄に備わっているのが[106]，王よ，弁論であります。(弁論について) 私の言うことをお聞き下さい。

(87)　意味があり，意味が様々でなく[107]，逸脱せず[108]，簡潔で[109]，粗野でなく，疑問の余地のない，最上の弁論をあなたに話しましょう。

---

[104]saṃkhyā　Ganguli: ascertainment of the faults and merits (p.62.43)　Deussen: Überlegtheit (p.681, v.82) Hopkins[Great Epic]: reckoning (p.95.9)　Edgerton[1965]: reasoning (p.331, v.82)　中村元 [1977]：列挙考察 (p.73, v.82)　中村 [2000]: 列挙 (p.82, v.82)

[105]duḥkhaiḥ prakarṣo yatra jāyate　Cs. prakarṣaḥ, iṣṭāniṣṭaprāptiparihārārtham utsāhaḥ / (prakarṣaḥとは，望むものの獲得と望まぬものの忌避のための努力が，という意味である)

[106]ekārthasamavetāni　Ca. ekārthasamavetāni, viśeṣyaviśeṣaṇabhāvāpannāni / (ekārthasamavetāni とは，限定・被限定の関係が成立している，という意味である)　Cn. ekasminn arthe paryavasitāni / (一つの事柄に帰する，という意味である)

[107]upetārtham abhinnārthaṃ　Ca.　upetārthaṃ, upetāḥ prārthitāḥ prādhānyena arthāḥ padānāṃ yatra tad upetārthaṃ sānvayaṃ, na gaur aśvadḥ puruṣo hastītivad asaṃbaddhārtham / abhinnārthaṃ, ekārthābhidhāyakatvena pradhānam / anekapradhānakatvena vākyabhedaḥ / (upetārtham とは，あるところに，upetāḥ，すなわち，主要なものとして望まれた，もろもろの語句のもろもろの arthāḥ意味がある，それが upetārtham であり，密接に関連しているものである。「馬は牛であり，象は人である」(?) といったような，意味の関連しないものではない。abhinnārtham とは，唯一の意味を述べるものという性質であるから，主要な，という意味である。複数の主要なものからなるために，弁論の相違が生じる)　Cp. upetārthaṃ, saṃbaddhārtham / abhinnārtham, vākyaikavākyatayā viśiṣṭaikārthapratipādakam / (upetārtham とは，意味が関連している，という意味である。abhinnārtham とは，文章が単一の文章であることによって，限定された一つの意味を理解させる，という意味である)

[108]P. nāpavṛttaṃ　B.,K.: nyāyavṛttaṃ

[109]na cādhikam　Ca. na cādhikam, adhikapadarahitam ity arthaḥ / (na cādhikam とは，余分な語句のない，という意味である)　Cp. yāvanmātraiḥ padaiḥ pratipādyaṃ bodhyate tato 'dhikapadahīnam / (ある量の語句によって理解すべき対象が認識される時，それより多い語句のない，という意味である)

(88)　尊大な調子を伴わず[110]，嫌悪を顔にださず[111]，偽りでなく[112]，三種の目的 (trivarga) と対立せず，そして洗練されていないこともなく (nāpy asaṃskṛtam) ,

(89)　言葉足らずではなく，また難解でもなく[113]，転倒した順序で話されたのでもなく[114]，補足を必要とせず，他の解釈の余地なく[115]，無目的ではなく，非論理的でもない[116](最上の弁論を)。

(90)　私は決して，愛欲から，怒りから，恐れから，貪欲から，悲しみ (dainya) から，そして，高慢から[117]，また，羞恥から，同情から[118]，自惚れから，話はしないでしょう。

(91)　述べんすることにおいて (vivakṣāyām)，話者，聞き手そして弁論が，完全に[119]一体となる時[120]，王よ，その時，意味 (artha) は明らかになるのです。

(92)　話すべきことにおいて，話者が聞き手を見下して，自分の利益を，あるいは他人の利益を話すならば[121]，弁論は成功することはありません[122]。

(93)　あるいは，ある人が自分の利益を横において (utsṛjya)，他人の利益を話すならば，

---

[110]P. na gurvakṣarasaṃbaddhaṃ　B.,K.: na gurvakṣarasayuktaṃ

[111]P. parāṅmukhamukhaṃ na ca　B. parāṅmukhasukhaṃ na ca　K. parāṅmukhapadaṃ na ca　Ca. parāṅ-mukhamukhaṃ, prakṛtāsaṃbaddham / (parāṅmukhamukham とは，話題と結びつかない，という意味である) Cn.parāṅmukhamukhaṃ, grāmyam / (粗野な，という意味である)　Cp. yacchravaṇāc chrotur mukhaṃ parāṅmukhaṃ na bhavati / rasajanakam / (それを聞くことによって聞き手の顔が横を向かない。情感を生じる，という意味である)

[112]nānṛtaṃ　Cn. anṛtaṃ, purāṇādyamūlakaṃ, meghasaṃdeśādivat / (anṛtam とは，『雲の使者』などのように，古潭などに基づかない，という意味である

[113]P.,B.: kaṣṭaśabdaṃ　K. naṣṭaśabdaṃ　Ca., Cp.: kaṣṭaśabdaṃ, durbodhapadam / (kaṣṭaśabdam とは，理解するのが難しい語句を，という意味である)

[114]P.,K.: vyutkramābhihitaṃ na ca　B.　vikramābhihitamṃ na ca　Cn. vikramābhihitaṃ, nṛtyadbhir iva padair vākyaracanam / (vikramābhihitam とは，踊るかのごときもろもろの語句によって弁論を構成し，という意味である。Cs. vyutkramābhihataṃ, pratijñāhetudṛṣṭāntavacanānāṃ viparītakramopetam / (vyutkramābhihatam とは，主張・理由・喩例の言葉の転倒した順序をもって，という意味である)

[115]P. na śeṣaṃ nānukalpena　B. na śeṣam anukalpena　K. sadoṣam abhikalpena　Ganguli: not far-fetched in respect of sense (p.64.11)　Deussen: nicht wegen bildlicher Ausdrucksveise erklärungsbedüftige (p.680, v.89)　中村元 [1977]: 第二次的 (譬喩的) 表現の故に示唆によって補いの文句を必要とすることなく (p.74, v.89)　中村 [2000]: 補足を要するものでなく，比喩的表現を具えていて (p.810, v.89)

[116]niṣkāraṇam ahetukam　Cs. niṣkāraṇaṃ, prayojanaśūnyam / (niṣkāraṇam とは，動機を欠いている，という意味である)　Ca.,Cp.: ahetukaṃ, yuktihīnam / (ahetukam とは，論理を欠いている，という意味である)　Cs. nyāyarahitam / (論理を欠いている，という意味である)　N. は，Bhoja の著作 Sarasvatīkaṇṭhābharana の中の修辞法に関する 24 項目 (śabdaguṇa) を引用・列挙しているが，第 87-89 詩節で挙げられているものとは一致しない。(Cf.Ganguli, p.64, fn.3; 中村元 [1977], p.84, 注 38)

[117]ānāryakāt　Cn. ānāryakāt, darpāt / (ānāryakāt とは，高慢から，という意味である

[118]P.,K.: hrīto 'nukrośato　B. hrīto na krośato

[119]avikalaṃ　Cn. avikalam, avyagram / (aviklam とは，冷静に，という意味である)

[120]P.,B.: samam eti　K. sa mameti　Cp. samam eti, yena rūpeṇa vaktā arthaṃ vivakṣati, tenaiva rūpeṇa yadi vākyaṃ pratipādayati, śrotā ca tenaiva rūpeṇākalayati / (samam eti とは，ある語形によって話者が意味を述べようとし，もし，その同じ語形によって弁論を理解させられれば，聞き手もまたその同じ語形によって (意味に) 気がつくのである，という意味である)　Cv. (gloss. sa mameti) sa pareṇa ucyamāno 'rthaḥ mametivivakṣāyām / (他者によって述べられている意味が，私のものだと言いたい時に)

[121]P. svārtham āha parārthaṃ vā tadā　B.,K.: svārtham āha parārthaṃ tat tadā

[122]na rohati　Ca. na rohati, na pramāṇatāṃ yāti / (na rohati とは，基準に達しない，という意味である)　Cn. na hṛdyārūḍhaṃ bhavati / (心に達することはない，という意味である)

疑念が[123]生じ，その人のその弁論もまた欠点あるものとなるでしょう[124]。

(94)　しかし，ある話者が，聞き手と自身の両者の利益は対立しないと語るならば，王よ，まさに彼こそが話者であり，他の人はそうではありません。

(95)　このようこの弁論は，意義があり (arthavad) 弁論の完全さを備えています[125]。心を散乱させず一点に集中してお聞き下さい，王よ。

(96)　「あなたは誰か，誰の子か，どこから来たのか」とあなたは私に尋ねました[126]。次の弁論はそれに対する答えです。一心に (ekamanāḥ) お聞き下さい。

(97)　樹脂と木片[127]，もろもろのほこりと水滴たちはよく結びついています。王よ，この世における生き物たちにとっても同様のことが成立しています[128]。

(98)　声，接触，味，色，香り，そして五つの感官は，異なる本性をもっていまする (pṛthagātmā)。十の (異なる) 本性をもつ者たちは，樹脂と木片のように結合しているのです[129]。(Cf.Hopkins[Great Epic]: Pañcaśikha, Thirty-one Elements, summary of vv.98-122, pp.152.20-154.6)

(99)　これらを突き動かす者は[130]存在しないということが定説 (niścaya) であります。ここでの一つ一つには[131]，自分についての，そして他のものについての認識は存在しないのです。

---

[123]viśaṅkā　Ca. viśaṅkā, bhramavipralambhakatvādirūpā / (viśaṅkā とは，困惑や欺瞞などを本性とする，という意味である)　Cp. utsargasiddhasya svārthasya tyāgaḥ kenābhiprāyeṇa kṛta ...ityādikā / ((viśaṅkā とは) すでに放棄を完成した人が (?)，自分の利益を放棄するのは，どんな意図で為されたのか，というものなどである)

[124]doṣavat　Cs. svārtham utsṛjya parārthaṃ vacanaṃ nāma viraktasya vāṇijyopadeśaḥ / (自分の利益を横において，他人の利益を語るということは，欲なき人の取引きの教えである)

[125]P., K.: upetaṃ vākyasaṃpadā　B. rārann ekamanāḥ śṛṇu (=P.96d)　この B. の句は，P. の 96d 句である。P.95bcd-96abc は B. では (C. でも) 欠落している。これは P.95a 句: *tad arthavad idaṃ vākyam* が，P.96c 句: *tatrottaram idaṃ vākyaṃ* が類似しているために，本来 P.95ab 句に続くべき語句のところに P.96c 句の後の語句 (*rājann ekamanāḥ śṛṇu*) が入ってしまった，すなわち視線乖離 (eye skip) のため二行下に視線がいってしまったと推測される。(Cf.MBh.XII.308.154, p.22, fn.6)

[126]P. aham abhicoditā　K. aham iti coditā (B.,C. は abc 句欠落)

[127]jatu ca kāṣṭhaṃ ca　Cn. jatu ca kāṣṭhaṃ ca, jatukāṣṭhaṃ bālakrīḍanakam / (jatu ca kāṣṭhaṃ ca とは，樹脂を塗った木片のことで，子供の玩具である)　Cf.MBh.XII.287.7 (jatu kāṣṭhavat)

[128]prāṇinām iha saṃbhavaḥ　Cv. jatukāṣṭhayoḥ pāṃsujalabindūnāṃ ca yathā yādṛcchikaḥ saṃbandhaḥ tathā prāṇinām saṃbandho 'pi yādṛcchikaḥ / (樹脂と木片，そしてもろもろの埃と水滴たちは，偶然結びつくように，生き物たちの結びつきも偶然の関係である)

[129]P. pṛthagātmā daśātmānaḥ saṃśliṣṭā　B. pṛthagātmāna ātmānaṃ saṃśliṣṭā　K. pṛthagātmā daśātmānaṃ saṃśliṣṭā

[130]codanā　Ca. codanā, ko 'sīti vadety evaṃrūpā preraṇā / (codanā とは，「あなたは誰か」述べよ，というような形をとる誘因のことである)　Cs. codanā, codyaṃ na kāryaṃ, kiṃ tv asty ai(e?)vātmeti niścayaḥ kāryaḥ / (codanā とは，疑われるべき (codya) ことは為されるべきではない。そうではなくて，アートマンは存在する，ということの決定が為されるべきである，という意味である)

[131]ekaikasya　Cp. ekaikasya, cakṣurādeḥ, acetanatvāt / (ekaikasya とは，目などは意識なき者であるから，という意味である)

(100)　目は目であることを知らず，耳は自分自身において作用しません。このように，別々に振る舞うゆえに[132]，相互に作用することはなく，この世界での水たちともろもろの埃のように，結びついた状態が生じることはないのです[133]。

(101)　(それらは，(作用を果たすためには) 他の外的なもろもろの要素に (guṇān) 依存するのです。それらについてもお聞き下さい。色，目，光の三種が視覚の原因です。この場合と同様に，もろもろの他の知識と知識対象においても，もろもろの原因が存在するのです[134]。

(102)　知識と知識対象の間に，思考器官 (manas) という別の要素 (guṇa) があります。この要素によって人は (ayam) 善悪を決定する際に疑問をもつのです (vicārayati)。(Cf.MBh. XII.187.12)

(103)　ここに (tatra) 第十二番目として統覚 (buddhi) と呼ばれる別の要素が伝えられています。それによって[135]，(人は) 疑問の生じたもろもろの認識対象において決定を行なうのです (vyasyati)。(Cf.Buitenen[1957]: *buddhi-sattva*, p.91)

(104)　そして十二からなるものの中に，精気 (sattva)[136] と呼ばれる別の要素があります。それによって，人は「気力あふれる人」[137]「元気のない人」と推理されるのです。(Cf.Buitenen[1957]: *buddhi-sattva*, p.91)

(105)　「知田者」というのが[138] そこでのまた別の第十四番目の要素です。人 (ayam) は，これによって「これは私のものである」，「これは私のものではない」と考えるのです[139]。

---

[132] vyabhicāreṇa　Cv. vyabhicāreṇa, śrotre sati cakṣur nāsti, cakṣuṣi sati śrotraṃ nāstīty arthaḥ / (vyabhicāreṇa とは，耳が存在しても目が存在しない。目が存在しても耳が存在しない，という意味である)　Cs. śrotrādayo nātmāna ity arthaḥ / (耳などは，アートマンではない，という意味である)

[133] P. saṃśliṣṭā nābhijāyante yathāpa iha pāṃsavaḥ　B.,K.: praśliṣṭaṃ ca na jānanti yathāpa iva pāṃśavaḥ　Ca. (reading *suśliṣṭā na ca jāyante*) na ca viṣayebhyo nirapekṣā ete cakṣurādayaḥ suśliṣṭā viṣayaprakāśanasvabhāvā eva jāyante, pāṃsava iva rāśībhūtāḥ, kiṃ tu bāhyam arthāntaram apekṣante / (もろもろの対象に依存しないこれら目などは，suśliṣṭā，すなわち，対象の照明を自性として，pāṃsava iva，すなわち，集団となって，jāyante 生じることはない。そうではなくて，(目などは) 外的な別の対象に依存するのである)　Cn. (reading *praśliṣṭaṃ nāpi jānanti*) praśliṣṭaṃ yathā syāt tathā, saṃśleṣaṃ prāpyāpīty arthaḥ / ((sandhi において) 異なる母音の結合があるように，すなわち，結合に達しても，という意味である)　Cp. (reading *saṃśleṣaṃ nāpi jānanti*) āpaḥ pāṃsavaś cānyonyaṃ saṃśliṣya na jānanti, tathaitāny api parasparaṃ praśliṣyāpi na jānanti / (水たちともろもろの埃は，互いに結合しても認識しない。それと同様にこれらは互いに結合しても認識しない，という意味である)　Cs. (reading *praśliṣṭam avajānanti*) praśliṣṭaṃ durdarśanam ātmānam avajānanti, upekṣante, na viṣayīkurvate / (praśliṣṭam，すなわち，見るのが難しいアートマンを，avajānanti，すなわち，無視する，すなわち，対象にしない，という意味である)

[134] anyeṣu jñānajñeyeṣu hetavaḥ　Cs. śrotrādijanyajñāne viṣayasaṃnikarṣaḥ iti hetavo draṣṭavyaḥ / (耳などによって生ずべき知識においては対象の近接がある，というように，もろもろの原因が理解されるべきである)

[135] yena　男性単数の語形であるが，この語が指すのは文脈上 *buddhi* でなければならない。

[136] sattvam　Cs. sattvaṃ, ojaḥ / (sattva とは，精気である)

[137] mahāsattvo　Cs. (gloss: bṛhadbalaḥ) (大きな力をもつ者)

[138] P.,K.: kṣetrajña iti　B. ahaṃ karteti　Cs. kṣetrajñaḥ, ajñānopādhiḥ caitanyābhāso jīvaḥ / (kṣetrajñaḥとは，無知によって限定された精神性の現われであり，個我のことである)

[139] P. manyate na ca manyate　B.,K.: manyate na mameti ca　Cs. na ca manyate, svarūpaṃ brahma na manyate ity arthaḥ / (na ca manyate とは，ブラフマンが本性であると考えない，という意味である)

(106)　そして第十五番目として別の要素が伝えられています，王よ。世間ではそれは個々の部分の集合の「全体」(sāmagryam) と言われています[140]。

(107)　そこではさらに別の要素があります。集合体 (saṃghāta) といわれる第十六番目のものです。形象と顕現[141] というこの二つの (十七番目と十八番目の) 要素は，これに依存しています。

(108)　快と苦，老と死[142]，獲得と損失，好みと嫌悪というのが第十九番目のもので，「対立的結合」(dvandvayoga) と伝えられています。

(109)　第十九番目 (の要素) の上に「時」(kāla) と呼ばれる別の要素があります。このように (iti) 第二十番目の要素 (「時」) によって，生き物たちの誕生と死がある，とお知り下さい。

(110)　この二十の要素からなる集合，五種の大元素，有と無の状態と結びつき[143]，照明者である他の二つの要素[144]，

(111)　というように，二十七の要素が伝えられています。さらに，他に生得性，精液，体力という三種の要素があります[145]。

(112)　三十一の要素 (kalā) が[146]列挙されて伝えられています。そのすべてが (samagrāḥ)

[140]pṛthakkalāsamūyasya (K. pṛthakkālasamūyasya) sāmagryaṃ tad ihocyate　Cn. tāsāṃ samūhasya sāmagryaṃ vāsanātmakam / (それらの集合の全体は，潜在力を本性としている)　Cv. (reading *-kāla-*) grahādīnām anukūlapratikūlādikālasya sāmagryam / (惑星などの順調・不順などの時間の全体である)

[141]P.,K.: ākṛtir vyaktir　B.: prakṛtir vyaktir　Cn. prakṛtiḥ māyā, vyaktis tatprakāśa ity etau dvau guṇau / etayoś ca prakṛtivyaktyor guṇatvaṃ dṛśyatvād eva / (prakṛti とは，幻影であり，vyakti とは，その顕れである，というのが，これら二つの要素である。この二つの prakṛti と vyakti は，見の対象であるからこそ，要素である)　Cs. ākṛtiḥ, sāmānyam, sāmānyavad anugata īśvaraḥ / vyaktiḥ, vastuvyaktir iva paricchinno jīvaḥ / (ākṛtiḥとは，共通性である。共通性のように随伴する自在神である。vyaktiḥとは，物の顕れであるかのごとくに限定された個我である)

[142]P. jarāmṛtyū　B.,K.: janmamṛtyū　「老」と「死」は，P. のように対立的あるいは対比的に捉えられるのか。

[143]sadasadbhāvayogau　Cn. sadbhāvayogaḥ, iha ghaṭo 'stīti vyapadeśaḥ, asadbhāvayogaḥ, iha ghṭo nastīty ādi-vyapadeśaḥ / yadvā, pramābhramaviṣayau sadasadbhāvayogau jñeyau / (sadbhāvayogaḥとは，ここに壺がある，という言明である。asadbhāvayogaḥとは，ここに壺はない，などの言明である。あるいは，sadbhāvayoggau とは，真知と過誤の対象である認識対象である)　Cs. sadbhāvayogo 'haṃkāraḥ, asadbhāvyogo mahān / guṇau, kāryatvāt paratantrau / (sadbhāvayoga とは，自我意識であり，asadbhāvyoga とは，「大」である。guṇau とは，結果であるために他に依存している両者は，という意味である)

[144]P.,K.: guṇāv anyau　B. guṇānvayau

[145]vidhiḥ śukraṃ balaṃ ceti traya ete guṇāḥ pare /　Ca. vidhir vihitaṃ karma dharmalakṣaṇaṃ, śukraṃ pradhānadhātuḥ, balaṃ tu ūrjo nāma śukraviśeṣa eva pāradamukhyo bhiṣajāṃ prasiddhataraḥ āgameṣu vyaktaḥ / (vidhiḥとは，ダルマを特徴とする定められた行為である。śukram とは，精液である。balam とは，ウールジャという名の，特別の精液であり，最上の水銀である。医師たちの間でよく知られていることは，もろもろの聖典において明らかである)　Cn. vidhir vāsanābījabhūtau dharmādharmau, śukraṃ vāsanodbhodhakaḥ saṃskāraḥ, balaṃ vāsanāviṣayaprāptyanukūlo yatnaḥ / saṃghātadharmeṇa eteṣāṃ pṛthaggrahaṇam / (vidhiḥとは，潜勢力の種子となったダルマとアダルマである。śukram とは，潜勢力を認識させる潜在印象である。balam とは潜勢力の対象への到達に適した努力である。これらは全体 (saṃghāta) の性質として，別々に捉えられる)　Cs. vidhir aniṣṭam / śukraṃ bhāvanājñānam / balaṃ śārīram / (vidhiḥは，望ましくないこと (?)，śukram は，瞑想による認識 (?)，balam は，身体的力である)

[146]P. ekaviṃśaś ca daśa ca kalāḥ　B. viṃśatir daśa caivaṃ hi guṇāḥ　K. evaṃ viṃśac ca daśa ca kalāḥ　Ca. kalāḥ, śarīrārambhasthitihetavo 'vayavasthānīyā aṇvyo mātrāḥ / (kalāḥとは，身体の形成・維持の原因である，部分として存在している極小の要素が，という意味である)　ここまでに挙げられている要素 (guṇa) の数は 30 であり，B.,K. は 30 としているが，P. は 31 という数字を挙げている。第 113 詩節に現れる prakṛti を算入したか。

存在するところが身体であると伝えられています。

(113)　ある人は[147]これらの部分の根本原因 (prakṛti) を未顕現のものと考えます。そして粗大な物を観察する別の人は[148]，これらの (部分の根本原因を) 顕現したものと[149]見るのです。

(114)　内我を考察する人々は (adhyātmacintakāḥ)[150]，未顕現にせよ，顕現したものにせよ[151]，あらゆる存在物の根本原因 (prakṛti) は二種からあるいは四種からなると[152]，見るのであります。

(115)　この未顕現の根本原因 (prakṛti) が，もろもろの要素として[153]顕現性に達したものたちが，私であり，あなたであり[154]，そして他の身体ある者たち (śarīrinaḥ) であります，王の中の王よ。

(116)　受精などの諸状態は[155], 精液と血 (の混合) より生じます。(まず最初に) それらが集まると (yāsām eva nipātena) カララ (kalala) という名の皮膜が生じます。(Cf.Hopkins[Great Epic]: growth of the body, p.178.6)

(117)　カララより[156]アルブダ (arbuda 泡状態) が生じ[157]，アルブダからペーシー (peśī 肉塊) が生じ[158], ペーシーより四肢が生じ, 四肢より爪と毛髪が生じるのです。(Cf.Hopkins[Great Epic]: growth of the body, p.178.6)

(118)　九カ月が満ちて，誕生した人間には，男あるいは女という特徴に従って，名称と

---

[147]kaścid　Cn. kaścid, nirīśvarasāṃkhyaḥ / (kaścit とは，無神論サーンキヤ論者のことである)

[148]anyaḥ sthūladarśī　Cn. sthūladarśī, kaṇādādiḥ (sthūladarśīは，カナーダなどは，という意味である)　Cs. prākṛto janaḥ / (平凡な人は，という意味である)

[149]vyaktaṃ cāsāṃ　Cn. vyaktaṃ, paramāṇavaḥ / cakārāt avyaktaṃ, kālādṛṣṭeśvarādi / (vyaktam とは，もろもろの極微である。ca の語によって，avyaktam，すなわち，時間・不可見力・自在神などが意図されている)　Cs. vyaktaṃ, bhūtapañcakaṃ, prakṛtim / (vyaktam，すなわち五種の元素からなるものを prakṛti と (見る))

[150]adhyātmacintakāḥ　この語を，中村元 [1977] は「形而上学を思索する人々は」と訳し (p.76, v.114),「内我を思索する人々」と解するのは不適切であることを注記している。(p.85, 注 60)

[151]vyaktaṃ　Cn. vyaktaṃ, caturvidhāḥ paramāṇāva eveti cārvākāḥ / (vyaktam は，四種の極微のみである，というのがチャールヴァーカの主張である)

[152]P.,B.: dvayīm atha catuṣṭayīm　K. dvayam atha catuṣṭayam　Cs. pradhānād vā kalānām utpattir astu, bhūtapañcakād vā / taddvayaṃ svabhāveśvaradvayaṃ vā / catuṣṭayīṃ, sattvarastamaḥpuruṣalakṣaṇāṃ prakṛtiṃ paśyantīty arthaḥ / (もろもろの要素の発生は，第一原因からあるべし，あるいは五元素からあるべし。あるいは，その二種は，自性と自在天という二種である。catuṣṭayīm とは，prakṛti を純質・激質・翳質・プルシャを特徴とすると見る，という意味である)

[153]kalābhir　Cn. kalābhiḥ, uktābhir eva triṃśatsaṃkhyābhiḥ / (kalābhiḥとは，これまでに述べられた三十の数からなる (要素として)，という意味である)

[154]P.,B.: ahaṃ ca tvaṃ ca　K. tato 'haṃ tvaṃ ca　Cn. yā ca niṣkalā bāhyānapeṣaprakāśatayā triṃśakād anyā sūryavat svayaṃjyotiḥ saiva tvaṃ cāhaṃ cānye smaḥ / (部分なく，外部に依存しない顕現性によって，三十からなるものとは異なり，太陽のごとく自ら輝くもの，それが，私，あなた，他の者たちとなった)

[155]bindunyāsādayo 'vasthāḥ　Ca. bindunyāsaḥ, retaḥsekaḥ (bindunyāsaḥとは，精液の放出である)

[156]kalalād　Ca. kalalāvasthā, citrarūpatā / arbudaṃ, budbudāvasthānam / peśī, māṃsakhaṇḍaḥ / (kalala の状態は，斑色の状態である。arubuda とは，泡の状態，peśīとは，肉片である)

[157]P. arbudotpattiḥ　B.,K.: budbudotpattiḥ

[158]P. peśī capy arbudodbhavā　B.,K.: peśī vā budbudāt smṛtā

形態 (nāmarūpatva) が生じるのです，ミティラーの王よ。(Cf.Hopkins[Great Epic]: *nāma-rūpa*, p.178, fn.2; Hopkins[1903]: *saṃpūrṇe navame māsi*, p.19.14)

(119)　生まれたばかりでは，その形態は，赤銅色の爪と指をもつものと観察されますが (dṛṣṭvā)，幼年の形態を得ると，(以前の) 形態として知覚されることはありません。

(120)　幼年から青年，青年から老年 (の形態が生じます)。この順序に従って，それぞれ以前の形態が知覚されることはありません。

(121)　別々の目的をもつ[159]諸要素の変化 (pratibheda) は瞬間ごとに，あらゆる生き物において起こっていますが，微細な故に目には見えないのです。

(122)　これら (の要素) の消滅と生起とは，それぞれの (瞬間的) 状態において (avasthāyām avasthāyām) 知覚されることはないのです，王よ。灯火の光の進行 (が瞬間ごとに知覚されないの) と同様です[160]。

(123)　全世界が，あたかも常に疾駆する駿馬のような，このような力をもつ時[161]，誰がどこから来たのでしょうか，あるいはどこから来なかったのでしょうか。

(124)　この世界は誰のものですか，誰のものでないのですか。この世界はどこから生じたのですか，どこから生じたのではないのですか。この世界では (iha) 生き物たちには，自分の (身体の) 諸部分とでさえいかなる結びつき (saṃbandha) があるのでしょうか。

(125)　例えば，太陽から，宝石から[162]，木々から[163]火が生じる[164]のと同様に，もろもろの要素の[165]集合から，人間たちは (生じるのです)。

(126)　あなたは，自分の中に，自分によって自分を見るように[166]，他人においても，どうして自分によって自分を見ないのですか。もし自分と他人との同一性を確信している

[159]pṛthagarthānāṃ　Cs. pṛthagarthānāṃ, nānāprayojanānām / pṛthivyā upaṣṭabhaḥ prayojanaṃ, apāṃ snehaḥ, tejasaḥ paktiḥ, vāyoś ceṣṭā, ākāśasya suṣiradānam ityādiprakareṇa kṣaṇe kṣaṇe pratibhedaḥ, prātisvikabhedo na vibhāvyate / (pṛthagarthānām とは，種々の目的をもつ，という意味である。地は支えることが目的であり，水は粘性，火は燃焼，風は運動，虚空は空洞の付与というように。kṣaṇe kṣaṇe 瞬間ごとには, (それらの) pratibhedaḥ, すなわち，それ自身の相違は，na vibhāvyate 見られらない，という意味である)

[160]dīpasyevārciṣo gatiḥ　Ca. yathā dīpārciḥ pratikṣaṇaṃ niḥsarantī na lakṣyate tathā / (灯火の光は，瞬間ごとに発されていても，(そのように) 知覚されない。それと同様に，という意味である)

[161]P.,B.: evaṃprabhāvasya　K. evaṃprakārasya

[162]maṇeś　Cs. maneḥ, sūryakāntāt, sūryakāntapratiphalitādityakiraṇāt / (maṇeḥ とは，日長石から，すなわち，日長石に反射された太陽の光から，という意味である)

[163]vīrudbhyaś caiva　Cn. vīrudbhyaḥ, manthanādinā / (vīrudbhyaḥ とは，摩擦棒などによって，という意味である)

[164]P. bhavaty　B.,K.: jāyanty　c 句冒頭の語が bhavati であれば，主語は b 句の pāvakaḥ，jāyanti であれば，主語は d 句の jantavaḥ になる。B.,K. は，P. のような bc 句にかかる意味のまとまりを避けたか。

[165]P. kalānām api　B. kalānām iva　K. kalānām iha　Cf.Hopkins[Great Epic]: *iva*, merely used to fill up the verse (=N.), p.154, fn.1.

[166]B. はこの P.ab 句の後に次の句を挿入している。

evam evātmanātmānaṃ yathā tvam anupaśyasi / (同様に，あなたは自分によって自分を見るように)

この句に対し，ニーラカンタは次のようにコメントしている。　Cn. kecid iha madhyamam ardhaṃ na paṭhanti / (ある人たちは，ここで（この詩節の）中間の一行 (=上の挿入句) を読まない)

のであれば[167]。

(127)　またあなたは私に「あなたは誰か，誰の子か」と何のために尋ねたのですか。「これは私のものであろうが，これは私のものではないであろう」といった数々の対立から解放された者にとって，「あなたは誰か，誰の子か，どこから来たのか」という言葉にどんな意味があるのでしょうか，ミティラーの王よ。

(128)　敵に対しても，友に対しても，中立者に対しても，勝利に対しても，同盟と戦争に対しても，行為した者には[168]，解脱者としてのどんなの特徴があるのですか，大地の守護者よ。

(129)　(法・利益・愛欲という) 三種の目的に関して，この世でのもろもろの行為 (karma) に七通りあることを[169]明らかに知ることなく，三種の目的に[170]執着をもつ者には，解脱者としてのどんな特徴があるのですか。

(130)　好ましい者と好ましくない者[171]，力弱き者と力強き者に対して，等しい (と見る) 目のない者には，解脱者としてのどんな特徴があるのですか。

(131)　かくして，解脱していないあなたに，解脱したものと (mokṣe) 自惚れが生じるようであれば，王よ，あなたは友人たちによって抑制されなければならない[172]。意識の散乱した者が (? vicittasya) もろもろの薬によって (抑制されるように)[173]。

---

[167]Cs. は，この句全体の趣旨を次のように解説している。　Cs. sarvabhūteṣv ātmana ekatvād ayaṃ praśnaḥ anupapanna ity arthaḥ / (あらゆる生き物たちにおいてアートマンは同一であるから，この問いは不適切である，という意味である)

Edgerton[1965] は，P.126ef 句 (「もし自分と他人との同一性を確信しているのであれば」) を次の第 127 詩節 ab 句と関連させて読んでいる。(p.331, v.126)

[168]kṛtavān　Cs. ityādipadārtheṣu yas tvaṃ viśeṣaṃ kṛtavān / (これらに始まるかずかずの言葉の対象において，yaḥ，すなわち，あなたは，すぐれたことを kṛtavān なした，という意味である)

[169]saptadhā　Cn. dharmaḥ, arthaḥ kāma ity asaṃkīrṇās trayaḥ, dharmarthayoḥ dharmakāmayoḥ kāmārthayoś ca saṃkīrṇā dvikās trayaḥ, dharmārthakāmānāṃ trisaṃkīrṇas trika eka iti saptadhā / (saptadhā とは，法・利益・愛欲というように混合しないものが三種，法と利益，法と愛欲，愛欲と利益とが混合した二種類からなるものが三種，法と利益と愛欲の三つが混合した三種類からなるものが一種である)　Cs. trivargaṃ vātapittaśleṣmavargaṃ, saptadhā tvaṅmāṃsamedosthimajjāśukrarūpeṇa, vyaktaṃ nyasytam / yadvā saptadhā karmasu, saptaprakāreṣu karmasu, dānādhyayanayāgādi trīṇi karmāṇi trivarṇikasādhāraṇāni, catvāri caturṇāṃ varṇānām asādhāraṇyena vihitāni / (trivargam とは，ヴァータ・ピッタ・シュレーシュマンの集合である。saptadhā とは，皮膚・肉・髄・骨・腱・精液の姿として vyaktam，すなわち，確定している，という意味である。あるいは，saptadhā karmasu とは，すなわち，七種の諸行為の中で，という意味であり，布施・ヴェーダ学習・祭式の三種の行為が，三種姓に共通なもの，四種が四種姓に独自なものとして規定されている)　Cv. trivarge saptadhā nyastam / saptadhā karmasu, agniṣṭomādisaptakraturūpakarmasu / (saptadhā karmasu とは，アグニシュトーマ祭など七種の供犠の形をした祭式において，という意味である)

[170]P.,K.: trivarge ca　B. trivargeṇa　Cs. trivarge, dharmārthakāme / (trivarge とは，法・利益・愛欲において，という意味である)

[171]P. priye caivāpriye caiva　B.,K.: priye vāpy apriye vāpi

[172]P. sa nivāryas　B.,K.: san nivāryas

[173]P. vicittasyeva bheṣajaiḥ　B.,K.: 'viraktasyeva bheṣajam　Ca. kāmādisaṅgimanasaḥ yathā bheṣajaṃ suhṛdbhir nivāryate, viparītaphalatvāt / (愛欲などに執着する心をもつ者の薬は，友人たちによって遠ざけられる。逆の結果を引き起こす故に)　Cs. viraktasya, dehasthitim anicchato yathā bheṣajam / (viraktasya，すなわち，身体の維持を望まぬ者には，薬は (遠ざけられる?) ように，という意味である)　中村元 [1977]：乱心した人の (vicittasya) 妄想は薬で制すべきであるのと同様である。(p.77, v.131)

(132)　もろもろの執着の状態をそれぞれ観察して[174]，自分によって自分の中に[175]「そこには[176]解脱者としてのどんな特徴があるのか」とご観察下さい，敵を征服する方よ。

(133)　次に，解脱に関連して，四つの部門において生じる，執着の原因である[177]細かな他のいくつかについて，私の言うことをお聞き下さい。

(134)　この大地すべてを一つの雨傘をもつ者として統治している王であっても，わずか一つの町に住んでいるにすぎません。(Cf.Hopkins[1899]: *ekacchatra*, p.25.38)

(135)　その町において彼が住むのはわずか一つの家であります。その家において彼が夜間横たわるのは，一つの寝台だけであります。

(136)　彼にとって寝台の半分は，妃が先に占めています。かくして，王は，このようにして (anena prasaṅgena)，この世での (統治の) 果報を[178]得ているのです。

(137)　もろもろの享楽においても，食事においても (bhojnāt)，もろもろの衣服においても，処罰と恩寵に関して考量されるべきもろもろの要素 (guṇa) においても[179]，(寝台の場合と) 同様です。

(138)　王は常に，他者に依存しています。小さなことにもしがみつきます。そして同盟・戦争を行う場合にも，どこに王の独立性がありましょうか。

(139)　女たちにおいても，もろもろの遊戯・気晴らしにおいても，王は決して独立していません。大臣との会議での審議においても (mantre)，どこに[180](王の) 独立性がありましょうか。

(140)　他の者たちに命じる時，王には独立性があると言われています。しかしそこでは王は，それぞれ (王として定まった) 政策 (guṇa) の中にいるのですから[181]，意志にかかわらずさせられているのです (avaśaḥ kāryate)。

---

[174]P.,K.: saṃdṛśta　B. saṃcintya

[175]*ātmanātmani* という表現に関連して，Duessen は，Chāndogya Upa. 8.3.2 の参照を指示している。(p.686, v.132)

[176]P. kiṃ tasmin　B.,K.: kim anyan　Ca. (reading *kim anyad*) ātmany eva saṃpaśyen na tu bahiḥ / ātmakrīḍa ātmaratiśc ca yaḥ sa eva mukta ity arthaḥ / (自分の中をこそ観察すべし。外ではない。自分に遊ぶ，自分に喜ぶという人こそが解脱している，という意味である)

[177]caturaṅgapravṛttāni saṅgasthānāni　Ca.　hastyādicaturaṅgaṃ balam uddiśya mamatātirekābhimānaphalāni śṛṇu / (象などの四つの部分からなる (軍の) 力に関連して，所有意識が優勢な自我意識のもろもろの果報を，śṛṇu，聞くべし)　Cn. caturṣv aṅgeṣu śayanopabhogabhojanācchādaneṣu pravṛttāni saṅgasthānāni pṛthvyādīni / (caturṣv aṅgeṣu，すなわち，寝台・享受・食事・衣服において，pravṛttāni，生じる，saṅgashānāni，すなわち，大地などを，という意味である

[178]P.,B.: phalenaiveha　K. phalenālpena

[179]P.: guṇeṣu parimeyeṣu nigrahānugrahau prati　B. guṇeṣu parimeyeṣu nigrahānugrahaṃ prati　K. guṇeṣv aparimeyeṣu nigrahānugrahaṃ prati

[180]P. kuta eva　B.,K.: kutas tasya

[181]P.,K.: tasmiṃs tasmin guṇe sthitaḥ　B. tasmiṃs tasmin kṣaṇe sthitaḥ　あるいは，「それぞれの場合，(主ではなく) 従属的に存在しているから」か。　中村元 [1977]：王はそれぞれの徳のうちに安住して (p.78, v.140)

(141)　睡眠を望んでも[182]，(王の) 行為を望む人々によって眠ることはできません。寝台において眠ることを許されても，意志にかかわらず起こされるのです。

(142)　「沐浴せよ，犠牲獣を祭るべし，飲め，食べよ，呪文献供せよ，もろもろの祭火を祭るべし[183]，話せ，聞け」と，意志を離れて，他の人々によって行為させられるのです。

(143)　人々は，王に近づいては近づいては，常に要求します。そして多くの人から[184]富を守る者である彼は，与えることもできないのです。(Hopkins[1889]: *rājan* as *vittarakṣin*, keeper of wealth, p.77.6)

(144)　与えるならば王の国庫は滅し[185]，与えなければ敵意が生じます[186]。(いずれにせよ) 嫌気を引き起こす悪しきことども (doṣāḥ) がすぐに王に迫るでしょう。

(145)　常に王を敬う賢者たち，勇者たち，富裕者たちを，一緒にいたとしても (ekasthāne ’pi)，疑うのです。王には恐れる必要がなくとも恐れるのです。

(146)　王よ，私が称賛したこれらの人々が腐敗する時，王には彼らに対する恐れが生じるのです。ありのままにご覧ください。

(147)　すべての人は，それぞれの家では王であります，すべての人は，それぞれの家では家長であります。(家長として) 処罰と報償を行うのは，王たちと等しいのです，ジャナカ王よ。

(148)　王には，息子たち，妻，自分，倉，友人たち，富がありますが，それらは，他の者たちと共通するものです。これらは，(他の者たち，そして王) それぞれの理由によって得られるのです。

(149)　「国が負けた，町が焼かれた，最上の象が死んだ」とこれら世間と共通するもろもろの事柄において，(王は) 誤った知識によって苦しむのです。

(150)　(王は) 願望・嫌悪・好感によって生じる[187]精神的な苦から，そして頭痛などもろもろの破滅的な[188]病気から (rogaiḥ) 解放されていません。

(151)　(王は) 多くの対立に襲われ，完全に疑い深くなり，夜を数えつつ，多くの敵をもつ王位に就いているのです (upāste)。

---

[182]P. svaptukāmo　B.,K.: svapnakāmo

[183]P. yajeti ca　B.,K.: yajety api

[184]P. mahājanāt　B.,K.: mahājanān　中村元 [1977] は，mahājanān を採り，「大衆に施しをすることができない」と訳し (p.78, v.143)，「プーナ校訂本は写本の裏づけがないのに mahājanāt と訂正している。」と注記している (p.85, 注 66)。　Cf. Hopkins[1899]: *mahājanāḥ*, plural, earliest case?, p.30.7.

[185]kośakṣayo　C. kośo ’kṣayo　Cf.Hopkins[1899]: *kośakṣaya*, ruin of exchequer, p.27.13)

[186]P. vairaṃ cāpy aprayacchataḥ　B.,K.: vairaṃ cāsya prayacchataḥ　Deussen: und sogar Feindschaft zieht er sich durch seine Gaben zu, p.687, v.144.

[187]P.,K.: icchādveṣapriyodbhavaiḥ　B. icchādveṣabhayodbhavaiḥ

[188]P.,K.: tathāiva vinipātibhiḥ　B. tathaivābhiniyantṛbhiḥ　(C. tathaivābhinimantribhiḥ)

(152)　その極めて楽しみ少なく苦の多い，価値のない王位に，誰が就こうするでしょうか。そして就いたあとで，誰が寂静を得るでしょうか[189]。

(153)　あなたは，この町を，国を，そして，軍隊 (bala)，国庫，大臣たちを，「これは私のものである」と考えます。これらは誰のものでしょうか，あるいは誰のものではないのでしょうか，王よ。

(154)　友邦と大臣，町，領国，軍隊，国庫，王という七種の支分からなる支配 (cakra) の集合体[190]が王国と言われています，王よ。(Cf.Manu Smṛti 9.294, Viṣṇu Smṛti 3.33,『大方廣佛華厳経』巻第十一 (大正 vol.10, p.712c8-13))[191]

(155)　七種の支分からなるこの王国は，三叉の杖のごとく，相互に特性 (guṇa) が結びついて存在しているのですから，どれがどれよりも特性として (guṇatas) すぐれていることがありましょうか。 (Cf.Manu Smṛti 9.296)

(156)　それぞれの時に応じて，それぞれの支分 (aṅga) が優越します。ある支分によってある目的が達成される時，(その時には) その支分が最も主要なものと考えられます。(Cf.Manu Smṛti 9.297)

(157)　七種の支分からなる集合と他の三種とが[192]十の部分からなる集合となって，この集合が王であるかのごとく王権を享受する (bhuṅkte) のです，最高の王よ。

(158)　従って，王が，大きな努力を行い，クシャトリヤのダルマに専心するならば，そのような王は，(税収の) 十分の一 (の取り分) で満足すべきです。しかし，その他の王は十分の一以下 (の取り分) で (満足すべきです)[193]。(Cf.Hopkins[1902]: subtraction, the idea of “less”, p.127.5; Oberlies[Grammar]: Different methods of forming numbers, *avara*-, p.122.16)

(159)　(取り分をこれら十の集合と) 共有しない王はいません[194]。王のいない王国は存在しません。王国がなければ，どこにダルマがありましょうか。ダルマがなければどこに最高のもの (param) がありましょうか。

---

[189]B., K. は，P.ab 句に対応する句の後に，次の句を挿入している。
tṛṇāgnijvalanaprakhyaṃ phenabudbudasannibham / (草についた火の炎のごとき，泡のごとき (王位に)

[190]P. saptāṅgaś cakrasaṃghāto　K. saptāṅgaś caiṣa saṃghāto　B. には (C. にも)*saptā.nga* で始まる P.,K. の cd 句がない。次の第 155 詩節の a 句も *saptāṅg* で始まっており，筆写の際に一行下の類似した語句に視線が行ってしまったか (eye skip)。(Cf.MBh.XII.308.95, p.15, fn.1)

[191]これらの箇所は，中村元 [1977]: p.86, 注 69 に指摘されている。

[192]trayaś cānye　Ca. trayaḥ, dūtayuvarājapurohitāḥ / (trayaḥとは，使者，王子，帝師は，という意味である)　Cn. udayavṛddhikṣayasthānākhyā nītiśāstroktāḥ / (誕生・成長・衰退の状態と呼ばれるものが政治学の書物に言われている)　Cv. trivargāḥ / (三種の人生の目的である)

[193]Hopkins は，cd 句に対し，次のような訳を提示している：a very energetic warlike king “should be satisfied with a tenth and any other with still less”.　(Hopkins[1902]: p.127.8-9)

[194]nāsty asādhāraṇo rājā　Ca. asādhāraṇaḥ, sarvaprajāsu viṣamavṛttiḥ / (asādhāraṇaḥとは，あらゆる生き物たちに対しての不公平な行為をする，という意味である)　Ca. を考慮すれば，「(一切の生き物に) 等しく振舞わない王はいない」という意味になろうか。　Ganguli: one who owns the kingly office without some one else owning it in the world (p.70.1-2)　Deussen: König, der nicht seinen Besitz mit jenen zehn anderen gemeinsam hätte, (p.688, v.158)　中村元 [1977]: これらのことがらに関して共通でない王は存在しない。(p.79, v.159)

(160)　ここでも，王と王国にとっての浄化具は最高のダルマであります。施物が大地であるアシュバメーダ祭は，(浄化具としては) 存在しないのです[195]。

(161)　この私は，王位の苦しみである[196]このような行為を百通り，あるいは千通りでも，言うことができます，ミティラーの王よ。

(162)　私は自分の身体に執着はありません。どうして他者の所有物に執着することがありましょうか。このように解脱した私に対して，あなたはそのように話すべきではありません。

(163)　あなたはパンチャシカ仙から解脱についてすべて聞いたのではありませんか。(瞑想の) 方法[197]，秘密の教義 (sopaniṣadaḥ)，ヨーガの補助手段，確定知を[198]伴う完全な解脱について。(Cf.Hopkins[Great Epic]: the doctrine of Pañcaśikha, p.154.35)

(164)　そのようにあなたは執着を離れ，もろもろの束縛を超えて存在しているのに，日傘などの特別な物たちにどうしてまた執着するのですか，王よ。

(165)　聞いたとしても (実際は) あなたは聞いていない，あるいは聞いたとしても誤って[199]聞いている，と私は思います。あるいは，あなたが聞いたことは聞いたかのように見える[200]か，別様に聞いたかであります。

(166)　あるいはまた，あなたがこれら (日傘など) 世間的な名称に依存しているのであれば，あなたは，通常の人がそうであるように，執着と障害 (avarodha) によって束縛されているのです。

(167)　私が，心によって (sattva) あなたの中に入り込んだとしても，もしあなたが完全に解脱しているとするならば，そこであなたに対していかなる害をなしたことになるのでしょうか。

(168)　空家に住むことは，苦行者たちのもろもろの規範において定まっています。空き家に入り込んでいる[201]私によって，誰の何が害されたのでしょうか。

---

[195]P.,K.: aśvamedho na vidyate　B. aśvamedho na yujyate　(C. aśvamedhena yujyate)　Ca. na vidyate, tvādṛśeṣv ekadeśādhipatiṣu / (na vidyate とは，汝たちのような一地方の支配者たちにおいては (存在しない)，という意味である。)

[196]P. rājyaduḥkhāni　B.,K.: rājaduḥkhāni　「王の苦」とした B.,K. の読みがわかりやすい。C. も同様に読んでいる。

[197]sopāyaḥ　Cn. upāyo nididhyāsanam / (upāya とは，深い瞑想である)　Bhattacharya[1985] は，この詩節から，パンチャシカの現存しない著作において *upāya* について議論があったことを推定している。(p.165, fn.4)

[198]sopāsaṅgaḥ saniścayaḥ　Ca. sopāsaṅgaḥ yogopāṅgāni / (sopāsaṅgaḥとは，もろもろのヨーガ支分である)　Cn. upāsaṅgo dhyānāṅgāni yamādīni / niścayaḥ brahmātmaikatvānubhavaḥ / (upāsaṅgaḥとは，禁戒など瞑想のもろもろの支分である。niścayaḥとは，梵我の同一体験である)

[199]P. mithyā vāpi　B.,K.: mṛṣā vāpi　mṛṣā は，副詞の意味を明確にしたか。

[200]śrutasaṃkāásaṃ　Cn. śrutasaṃkāśaṃ, śāstrābhāsarūpam / (śrutasaṃkāásam とは，聖典の外見をもつ，という意味である)

[201]śūnyam āvāsantyā　Cn. śūnyaṃ, bodhaśūnyaṃ tava buddhisattvam / (śūnyam とは，意識が空虚になったあなたの悟りの心に，という意味である)

(169)　両手によっても，両腕によっても，両足・両腿によっても，汚れなき方よ，身体の他のもろもろの部分によっても，私はあなたに触れることはないのです，王よ。(Cf.Hopkins[1989]: a proof of her innocence, p.350.6)

(170)　偉大な家に生まれ，恥を知り，遠くを見るあなたは，真実にせよ虚偽にせよ，密かに為されたこのことを，このように集会の場で述べるべきではありません。

(171)　ここにいるバラモンたちは師であります。同様に大臣たちも最上の師であります。そしてあなたもまた彼らの師であります。このように (ここにいる方々は) 相互に尊敬の対象 (anyonyagaurava) であります。

(172)　あなたは，このことをこのように順次考察して (anusaṃdṛśya)，言って良いことと悪いことを吟味したならば，男女のこの交わり (samavāya) を，公の場において (saṃsadi) 言うべきではありません。

(173)　蓮の葉にある水滴は, 葉に (触れることなく) 留まっています[202]。それと同様に, 私は触れることなくあなたの中に住むでありましょう, ミティラーの王よ。(Cf.Hopkins[1989]: a proof of her innocence, p.350.7)

(174)　私は触れていないとしても[203]，あなたが何らかの接触を感じるならば，かの乞食者 (パンチャシカ) によって，あなたの知識は種子なきものにされた (jñānaṃ kṛtam abījaṃ) とどうして言えましょうか。(Cf.MBh.XII.308.34)

(175)　あなたは，家長からは離れたが，到達しがたき解脱に達することなく，両者の中間において，解脱を語るだけの者として[204]存在しているのです。

(176)　同一性と別異性の認識をもつ解脱した者にとって，もう一人の解脱者 (との結合) によって，心と心でないもの (身体) とが結合しても[205]，種姓の混合が生じることはありません。(Cf.MBh.XII.308.59)

(177)　(合体して) 別ではないと観察された対象の[206]種姓と生活期が別である場合[207]，(その対象の中の) 甲は乙ではないと知った後には，甲は乙に作用することはありません[208]。

[202]P.,K.: tatparṇasaṃsthitam　B. tatprarṇam aspṛśat　B は (C. も)，水滴が葉に触れないことを明確にしている。

[203]P. yadi vāpy aspṛśantyā me　B.,K.: yadi cādya spṛśantyā me　Ca. aspṛśantyāḥ, jijñāsāyai pravṛttāyaḥ, na kāmapravṛttayāḥ / (aspṛśantyāḥ とは，知りたくて行動しているのであって，愛欲のために行動しているのではない者にとって，という意味である)

[204]P. mokṣavātikaḥ　B. mokṣavārtikaḥ　K. mokṣavādikaḥ

[205]bhāvābhāvasamāyoge　Ca. bhāvābhāvasamāyoge, bhāvasya kāmasya, akāmasya niṣkāmanāyāḥ samāyoge, samāgame varṇasaṃkaradoṣo na, kiṃ tu sakāmasya sakāmena yogo doṣaḥ / (bhāvābhāvasamāyoge とは，bhāvasya，すなわち，愛欲の，(abhāvasya すなわち) akāmasya，すなわち，愛欲なき女の，samāyoge，すなわち，結合においては，種姓の混合という誤りはない。しかし，愛欲ある者と愛欲ある者との結合は (種姓の混同という) 誤りがある，という意味である)

[206]P.,B.: dṛṣṭārthasyāpṛthaktvinaḥ　K. dṛṣṭārthasyāpṛthaktvataḥ　Cn. apṛthaktvinaḥ, pṛthaktvaṃ puṃprakṛtyor vivekaḥ, tad asyāstīti pṛthaktvī, tadanyasya / (pṛthaktvam，すなわち，プルシャとプラクリティの相違であり，その相違をもつものが pṛthaktvin である。apṛthaktvinaḥ とは，それとは異なるものの，という意味である)

[207]P. varṇāśramapṛthaktve ca　B.,K.: varṇāśramāḥ pṛthaktvena

[208]P. nānyad anyad pravartate　B.,K.: nānyad anyatra vartate

(178)　手の中に瓶があり，瓶の中に牛乳があり，牛乳の中に蝿たちがいる。(このように) 依存するものと依存されるものとの関係 (yoga) によって，私たちは (互いに) 異なるものとして，(相互に) 依存しているのです。

(179)　しかし，瓶には牛乳の本性 (bhāva) はなく，牛乳もまた蝿たちではありません。これらの本性は自らに依存しているのであって[209]，他に依存しているのではありません。

(180)　種姓が異なる場合に，生活期の相違に基づいて，そして相互の相違に基づいて，どうして種姓の混合が生じるでしょうか。

(181)　私は生まれとして (jātyā) 最高の種姓をもつ者ではなく，ヴァイシャでもなく，低い種姓の者でもありません。王よ，私は，あなたと同じ種姓をもち，混乱なき清浄な母胎をもつ者です。

(182)　あなたは，プラダーナという名の王仙をきっと聞いているでしょう。私をその家系に生まれたスラバーという名の者とお知り下さい。

(183)　私の祖先たちのサットラ祭において，ドローナ山，シャタシュリンガ山，ヴァクラドヴァーラ山は[210]，マガヴァット山と共に祭壇を築きました[211]。(Cf.Hopkins[1910]: Mountains assist at a sacrifice, p.356, fn.2)

(184)　この私はその家に生まれ，私にふさわしい夫 (となるべき人) がいなかったので，もろもろの解脱の教義の中で育てられ，単独で聖者の誓約 (munivrata) を実践しています (carāmi)。

(185)　私は衣服によって (真実を) 隠す者ではありません[212]。他人の財産をねらう者でもありません[213]。ダルマの混合をなす者でもありません。自分のダルマにおける誓約を堅く持している者です。

(186)　私は，自分の誓いにおいて動揺することはありません。私は思慮なく語る者ではありません[214]。私は思慮なくあなたの近くにやってきたのではありません，人々の王よ。

(187)　あなたの意識 (buddhi) は解脱に向けられている (bhāvita) ということを聞いて，幸福を求める私は，あなたのその解脱もまた知りたいがためにここにやって来ました。

[209] P.,K.: svayam evāśrayanty　B. svayam evāpnuvanty

[210] P.,K.: vakradvāraś ca　B. cakradvāraś ca

[211] citā maghavatā saha　Cn.,Cp.: citāḥ, cayane iṣṭakāsthāne (Cp. agnicayasthāne) niveśitā ity arthaḥ / (citāḥとは，祭壇においてレンガの代わりに (Cp. アグニチャヤナの祭場において) 置かれた，という意味である)　Cv. maghavatā, maghavannāmakaparvatena saha citāḥ, yajñayūpastambhena saṃcitāḥ / (maghavatā とは，マガヴァットという名の山と，saha 共に，citāḥ，すなわち，祭式の祭柱の基礎を積み重ねた，という意味である)　中村元 [1977]：インドラ神とともに (p.82, v.183)

[212] nāsmi satrapraticchannā　Cn. satrapraticchannā, kapaṭasaṃnyāsī / (satrapraticchannā とは，偽りの遊行者である，という意味である)　Cf.MBh.XII.308.71cd

[213] P.,K.: na parasvābhimāninī　B. na parasvāpahāriṇī

[214] P. nāsamīkṣyapravādinī　B.,K.: nāsamīkṣya pravādinī

(188)　私は，自分の主張と他人の主張の，一方に与して言っているのではありません[215]。すでに解脱した私は (再び) 解脱することはなく[216]，すでに平安に至った私は (これから) 平安に至るということはありません。

(189)　乞食者 (bhikṣu) は，町の中の空家に一晩留まるべきであるのと同様に，私はあなたのこの身体に一夜留まるとしましょう。(Cf.MBh.XII.308.26.Cs. 注)

(190)　かくして私は，座席を与えられ[217]，言葉の歓待によってもてなされ，よい寝台でよく眠って満足し，明日去るでありましょう，ミティラーの王よ。

(ビーシュマは言った。)[218]

(191)　このような根拠に基づいた意味のある数々の弁論を聞いて，王はそれ以上いかなる言葉も発しなかった[219]。

---

[215]na vargasthā bravīmy etat svapakṣaparapakṣayoḥ / Cn. svapakṣaparapakṣayor madhye vargasthā, svapakṣe pakṣapātena sthitā / (自分の主張と他の主張の中間で，vargasthā，すなわち，自分の主張に偏して，という意味である)

[216]P. na mucyate　B. vyāyacchate　K. vimucyate　Cn. vyāyacchate, mallavat svajayārthaṃ vyāyāṃ, vādaśramaṃ na karoti, yaś ca śānto brahmaṇi śāmyati sa muktaḥ / (vyāyacchate とは，力士のように，自分の勝利のための努力，論争の努力をしない，という意味であり，yaś ca śānto，すなわち，ブラフマンの中に，śāmyati 静まった者，彼は解脱した者である，という意味である)

[217]P. āsanadānena　B.,K.: mānapradānena

[218]B.,K. は，この詩節の前に bhīṣma uvāca を挿入している

[219]nādhijagau　Cn. nādhijagau, nādhigatavān, uttaraṃ vaktuṃ na samartho babhūvety arthaḥ / (nādhijagau とは，思いつかなかった，すなわち，返答する能力がなかった，という意味である)

（2015年　月　日　受付）
（2016年 3月 9日　受理）